

●龍宮。龍
王の居る處
なり。逆鱗。
の喉下に逆
鱗あり。に
鱗の逆鱗に
寸あり。に
寸の逆鱗に
人との逆鱗
人との逆鱗
ず。人を殺

△廣寒宮殿。
月の異名。

なり清淨身。今日眞靈何の處にか見
ひ、彩雲碎けて箭微塵を破る。恭しく
以みるに(名)人去りて月に伴ひ、
月來りて人に侶ふ。凡を捨て、法身
を證せば、六道輪廻の迷津を慕過す。
人を超えて佛身に歸し、龍宮の波浪
を超越する逆鱗、然も斯の如くなり
と雖も、生死超越の一句、作麼生か
指陳せむ。咄。千般人の面目を幻出
するは、只一點の舊精神に憑る。

西風吹散桂枝の枝、廣寒宮殿を

明清淨身。今日眞靈何處
見。彩雲碎箭破微塵。(眞)
恭以。(入名)人去伴月、
月來侶人。捨凡證法身。慕
過六道輪廻迷津。超人歸
佛身。超越龍宮波浪之逆
鱗。雖然如斯。生死超越之
一句。作麼生指陳。咄。
幻出千般人面目。只憑一
點舊精神。

下 火(八月。男子)
西風吹散桂枝。發豁廣

唐の玄宗月
宮に遊びた
るに勝し。之
府と曰へり
と云ふ。

●驚鷲。さ
ぎとうとを
云ふ。共に
水鳥なれど
も、驚はれ
色に黒はれ
は。黒色な
り。紅蓮。蓮
×に生ずる水
に生ずる水
辛してその葉
なる。紅と葉
*なる。紅と葉
葉の浮草。四
に似て。葉水

發豁する時、箭已に絃を離れて敵の
對すると無し、生死の縛を破るに遲
々たるを莫れ。夫れ以みるに(名)
身を藏すに處莫し、没跡々々、處とし
て身を藏すと莫し驚鷲雪に立てども
同色に非ず。蘆花月明紅蓼白蘋、
牛頭馬頭菩提の伴倫となる。且ら道
へ、作麼生か是れ不死底の一句。(火
を投ず)試みに焰堆の中より看れば
三尺の火蛇露地に噴る。

桂殿月清し萬里の秋、秋毫も豈に片

寒宮殿時。箭已離絃無敵
對。破生死縛莫遲遲。(支)
夫以。(入名) 莫藏身處。
没跡没跡。處莫藏身。驚鷲
立雪非同色。蘆花月明。紅
蓼白蘋。牛頭馬頭。爲菩提
伴倫。且道。作麼生是不死
底一句。
(投火云)試從焰堆中看。三
尺火蛇露地噴。

同 (八月。女子)
桂殿月清萬里秋。秋毫豈

五月中に生るる花の白雲にふりかざりて
 故に桂殿に異稱ありて
 宮の備は美女好離魂
 情は美女好離魂
 美は美女好離魂
 女は美女好離魂
 同は美女好離魂
 演は美女好離魂
 離は美女好離魂
 是れは美女好離魂
 句は美女好離魂
 れは美女好離魂

雲の浮とあらじや。看よ他の一機を
 瞥轉する處。大火聚の中足に任せて
 遊ぶ。夫れ以みるに、(名) 倩女離魂
 と道ふが如きは、那箇か是れ眞實底
 ぞ、死や甚れの處に向つて去り、生や
 何れの處より來る。喝。生死去來共
 に颺却し、鏝湯爐炭恣に徘徊す。

有片雲浮。看他瞥轉一機
 處。大火聚中任足遊。(尤
 夫以。(入名) 如道倩女
 離魂。則那箇是眞實底。死
 向甚處去。生自何處來。
 喝。生死去來共颺却。鏝
 湯爐炭恣徘徊。

同 (九月)

九月水天一色の秋、暖和沈没して爽
 凄流る。蕙光獨り傲る藩籬の菊、復見
 る朝に開き暮に落ちて颺るを。夫
 以みるに(名)暗に木馬を放ち、明に

九月水天一色秋。暖和沈
 沒爽凄流。蕙光獨傲藩籬
 菊。復見朝開暮落。 (尤
 夫以。(入名) 暗放木馬。

南の北東西の四海
 洲の間にありて
 九の無何有の頁を
 見よ

△幢網の寶珠に及
 けの目珠に光を
 數ひ釋の寶珠に及

鐵牛を繫ぐ。西山月落つ、洞庭三萬
 里。北海風惡し、何の處にか歸舟を
 泊せむ。眞に皮袋を裂破せば、鏝湯
 爐炭則ち佛性樓。頓に懷球を放下せ
 ば、劔樹刀山即ち眞如界。今火宅の
 三界を出て四大海を掀翻し、已に無
 何有の郷に入りて百川の流れを逆派
 す、然も與麼なりと雖、即今報地の
 知を含む。有佛の處住すると莫く、
 無佛の處急に走過せよ。畢竟如何が
 安著せむ。咄。幢網の寶珠に向背な
 く、自他の光影爽なること秋の如し

明繫鐵牛。西山月落。洞庭
 三萬里。北海風惡。何處泊
 歸舟。眞裂破皮袋。鏝湯爐
 炭則佛性樓。頓放下懷球。
 劔樹刀山即眞如界。今出
 火宅三界。掀翻四大海。已
 入無何有郷。逆派百川流。
 雖然與麼。即今含報地。知
 有佛處莫住。無佛處急走
 過。畢竟如何安著。咄。
 幢網寶珠無向背。自他光
 影爽如秋。

相映して重
起無盡の縁
喻を現すに
るを云ふた

◎羚羊。羊
に似て角の
大なるも
の、夜は角
を木上に懸
けて思を防
ぐと云ふ。

生死涅槃昨夢の如く、覺來れば衆罪
亦空と作る。還郷の時節無事に類す
鬱々たる黄花舊に依りて紅なり。恭
しく惟みるに、(名)會すや會すや、
淨裸々、清風明月を拂ひ、赤洒々、
明月清風を拂ふ。安身の處如何が研
窮せむ。(火把を抛)角を掛くる羚羊、
跡を見ず。

重陽の時節菊猶全し、野徑霜を帯び
て萬草深し。蟋蟀聲中歸路活す、西

同 (九月)

生死涅槃如昨夢。覺來衆
罪亦作空。還郷時節類無
事。鬱鬱黄花依舊紅。(東)
恭惟。(入名)會麼會麼。
淨裸裸清風拂明月。赤洒
洒明月拂清風。安身處
如何研窮。(抛火把云)
掛角羚羊不見跡。

同 (九月男子)

重陽時節菊猶全。野徑帶
霜萬草深。蟋蟀聲中歸路

◎劍去刻
一四頁を見

風霧を拂ひて月沈々、夫以みるに、
(名)靈鑑を目前に懸けて生死の塵縁
を照破し、智劍を掌中に有して凡聖
の愛纏を穿却す。須く大丈夫の事を
辨すべし。妙は神機の未だ兆さざる
以前に在て、轉轉活潑たり。切忌
む、劍去りて絃を刻むとを。然も是
の如しと雖も、畢竟如何が理會せむ。
喝。正躰金剛本來の火、虚空焼けて
一微塵と作る。

纔に殘香を住む節後の花、風に臨み

活。西風拂霧月沈沈。(侵)

夫以。(入名)靈鑑懸目
前。照破生死塵縁。智劍有
掌中。穿却凡聖愛纏。須辨
丈夫之事。妙在神機未兆
以前。轉轉活潑。切忌劍去
刻絃。雖然如是。畢竟如何
理會。喝。
正躰金剛本來火。虚空燒
作一微塵。

同 (九月女子)

纔住殘香節後花。臨風遮

●哩囉。八頁を見よ。

△尼惣持。達磨に夢じてその肉をばり。得たりと云なり。△大愛道。摩訶波闍波提の譯名な波。母に佛して、後に出家して佛の始めと丘とな

口塵點劫。無時無量。長時劫を云ふ。卵生。四生。卵生。六凡。凡夫。道。十惡。殺。盜。淫。婬。妄言。綺語。兩舌。惡口。嫉。恚。癡。五逆。父。母。殺。殺。殺。佛。身。血。を。破。し。佛。身。阿。羅。漢。を。殺。す。これ。九。三。頁。を見。閻。浮。梵。

て遮莫れ哩囉を唱ふるとを。灼然として女にあらず男子にあらず。歸路依々として火蛇を弄す。夫以みるに。(名)生前は尼惣持の達磨の印證を得るが如く、死後は大愛道の世尊の記前似たり。眞淨界中に去來なく、幻妄境内に生滅あり。洞然として明白なる是れ何物ぞ。擬議不來ならば、七花八裂。畢竟如何。嘆。火中の紙馬、生鐵を噛む。

潜鱗十月滿林の霜、五彩の楓樹織娘

莫唱哩囉。灼然非女非男子。歸路依依弄火蛇。(麻)夫以。(入名)生前如尼惣持。得達磨印證。死後似大愛道。世尊之記前。眞淨界中無去來。幻妄境内有生滅。洞然明白是何物。擬議不來。七花八裂。畢竟如何。嘆。火中紙馬。噛生鐵。

下 火 (十月) 潜鱗十月滿林霜。五彩楓

を欺く。塵點劫來何ぞ異なることかあらむ。夢中の行事只閑忙。夫れ以みるに(名)不平の世界には、寶劍篋を離れ、四生六凡の苦海を截斷し、十惡五逆の罪障を消滅す。山河大地皆是れ法相、妙路忽ち通達し、明月清風來る。斯の佛性の玄關普く光を放ち、兜率天宮全く他界に非ず。阿鼻泥犁會て自郷にあり。維は茲れ、情識度量の閑言語なり。即今諸聖を慕はず、已靈を重ぜざる底の行履如何が擧せむ。喝。夜は閻浮の夢床を

樹欺織娘。塵點劫來何有異。夢中行事只閑忙。(陽)夫以。(入名)不平世界。寶劍離篋。截斷四生六凡苦海。消滅十惡五逆之罪障。山河大地皆是法相。妙路忽通達。明月清風來。斯佛性玄關。普放光。兜率天宮。全非他界。阿鼻泥犁會。有自郷。維茲。情識度量閑言語也。即今不慕諸聖。不重已靈底之行履。如何擧。

語閣浮提の
略名大地の

破りて、壁は梅花千里の春を盡す。

喝。夜破閣浮夢床。壁盡
梅花千里春。

同 (十月)

風、寒雲を吹いて天色青く、飄々たる
黄葉去りて停ると無し。目前識得
す真如の理、三界唯心處處に罄し、
夫以みるに、(名) 臆懼を經過して堅
く戒意を持す。直に佛祖の門底に遊
び、頓に淨界を超え、速に天下の安
寧に任す。然も恁麼なりと雖、末後
安樂の一句作麼生。喝。寒氣凜々として
千里同じく、滿林の楓葉風に隨

風吹寒雲天色青飄飄黃
葉去無停目前識得真如
理三界唯心處處罄。(青)
夫以。(入名) 經過臆懼
堅持戒意直遊佛祖門底
頓超淨界速任天下安寧
雖然恁麼末後安樂之一
句作麼生。喝。寒氣凜
凜千里同滿林楓葉隨風

—(篇三第經寶門禪)—

×臆懼の
體は意の
子なり。の
祖法演の語
に牛窓を
過ぐよつて
何に得ざる
と云ふ句
あり。これ
あり。

ひて飛ぶ。

飛。

同 (十月、男子)

●大清。大
虚のこと。大
猛烈たる霜風草木枯れ、寒雲月を吐
いて雁聲孤なり。去來死活共に双
廓々たる大清一物も無し。夫れ以み
るに、(名) 陵層たる山嶽體露金風。
劔刃上に行くが如く、氷凌上を踏む
に似たり。萬木を殺倒し、千叢を死
却す。乍ち殺倒に中れども、未だ死
活を盡さず。未喪底の人、即今何れ
の處に向つてか去る。喝。大地炎炎
たり火の發る時、須彌已に須く是れ

猛烈霜風草木枯寒雲吐
月鴈聲孤去來死活共双
廓廓大清一物無。(虞)
夫以。(入名) 陵層山嶽
體露金風如行劔刃上似
踏氷凌上殺倒萬木死却
千叢乍中殺倒未盡死活
未喪底人即今向何處去
喝。大地炎炎火發時須
彌已須是粉碎。

—(語法祭葬家在)—

粉碎すべし。

四望の錦雲十月の天、滿峯の霜露更に凄然。言ふとを休めよ電影生と死と、雨竹風松皆禪を説く。夫以みるに、(名) 即今活中に死あり、死中に活あり。死活動静共に混す。生死夢破れて凡聖路絶ゆ。恁麼にし來り、不恁麼にし去る。然も是の如しと雖も、(名入る) 送行の一句作麼生。(火) 要關を把斷して重ねて提撥すれば、火裡の紅蓮香拂々たり。

●拂々。香氣の揚がる。とを形容す。

同 (十月女子)

四望錦雲十月天。滿峯霜露更凄然。休言電影生兼死。雨竹風松皆說禪。(先) 夫以。(入名) 即今活中有死。死中有活。死活動静共混。生死夢破。凡聖路絶。恁麼來。不恁麼去。雖然如是。(入名) 送行一句作麼生。(投火) 把斷要關。重提撥。火裡紅蓮香拂拂。

看よ看よ没量大人の相、白雪紛々として山骨粧ふ。始て見る早椽籬上の客。眼前の風物は錦裳。夫以みるに、(名) 仲冬の愛日静にして墊堂を照す。一歳平直なれば、誼龍、龍門に飛ぶ。右轉是れ銀鳳乾坤に舞ふ。生死の堅關を打破し、涅槃の高岸に到る底の事作麼生か舉唱せむ。咄。水晶宮裡神仙の女、香尋山中藥程を得たり。

同 (十一月)

看看没量大人相。白雪紛紛山骨粧。始見早椽籬上客。眼前風物は錦裳。(陽) 夫以。(入名) 仲冬愛日静照墊堂。一歳平直。誼龍飛龍門。右轉是銀鳳舞乾坤。打破生死之堅關。到涅槃高岸底事。作麼生舉唱。咄。水晶宮裡神仙女。香尋山中得藥程。

●黄鐘。十一月異稱。六輪廻の六道。威音。三四頁を見よ。

▲眞諦俗諦。有との二諦。なり。▲普賢。陀羅三滿多。陀羅の譯名は菩薩の名。

身口意の三密門を説き。明く行願を依す。佛に依ることを得。

黄鐘風硬くして月花散じ、天運一陽來復の時、万物同根万物に隨ひ、六輪々轉して悉く無爲。夫以みるに、(名)機輪轉する處閃電も猶ほ遅し威音の一箭、新羅國を過ぐ。今時半弓扶桑の枝に掛く。眼裏の花蕚を掃除して腦後更に眞諦と俗諦とを見破す。心頭の火焔を滅却して、臆前已に有爲と無爲とを識取す。地獄と天堂と甚麼の莫妄想ぞ、生死と涅槃と甚麼の閑思惟ぞ。正與麼の時、不是心不是佛の所に到らば、奈何が安著

黄鐘風硬月花散。天運一陽來復時。万物同根隨万物。六輪輪轉悉無爲。(友)夫以。(入名)機輪轉處。閃電猶遲。威音一箭過新羅國。今時半弓掛扶桑枝。掃除眼裏花蕚。腦後更見破眞諦俗諦。滅却心頭火焔。臆前已識取有爲無爲。地獄天堂。甚麼莫妄想。生死涅槃。甚麼閑思惟。正與麼時。到不是心不是佛所。

せむ。喝。兀山漫水只是の如し、爲に靈機を説けども八刻遅し。

須彌濛々たり大虚空、混雜す普賢銀界の中。千山明白の地を抄倒せば、碧層々たる處一孤峯。夫以みるに、(名)生の喜ぶべきも無く、死の憂ふべきもなし。煩惱の捨つべきもなく菩提の求むべきもなし。月は皓々、水は悠悠、頭々物々聖の伴儔を絶するなし。這は是信士の生を出て死に入る、大解脱を得る底の一句なり。喝。

何安着。喝。兀山漫水只如是。説靈機八刻遅。

同 (十一月男子) 須彌濛濛大虚空。混雜普賢銀界中。抄倒千山明白地。碧層層一孤峯。(冬)夫以。(入名)無生可喜無死可憂。無煩惱可捨。無菩提可求。月皓皓水悠悠。頭頭物物。無聖絕伴儔。這是信士。出生入死。得大解脱。底一句。喝。嗔烟蓬

嘖烟蓬蔴の中、優曇の香馥郁たり。

蔴中優曇香馥郁。

同 (十一月女子)

五欲の欲望の色
聖の味觸の望の色
五種の欲望の色
なり。娘生。九
×娘生。九
四頁を見よ
の白珂。玉
の名なり。玉
に如きものな
如きものな
り。と云ふ。
七頁を見
よ。夜明、八
具の機梭。織
具の機梭。織

人間五欲の羅を透出して、翻身の端的機梭を擲つ。娘生の面目還りて相見せば、江南江北白珂を飛す。恭しく惟みるに、(名) 貞心堅固にして言舌柔和。荆棘林中、脚を留めず、夜明簾外須く轉過すべし。遊や幽源の底に更に龍蛇を辨じ、到や三昧の門に能く豹虎を分つ。是故に心月塵無して野水に浮び、靈光味さずして山河を照す。箇は是信女機梭を放抛し

透出人間五欲羅。翻身端
的擲機梭。娘生面目還相
見。江南江北飛白珂。歌
恭惟。(入名) 貞心堅固
言舌柔和。荆棘林中不留
脚。夜明簾外須轉過遊也
幽源之底。更辨龍蛇。到也
三昧之門。能分豹虎。是故
心月無塵。浮野水。靈光不
昧照山河。箇是信女放抛

て機は軸を
轉ずるもの
を以て機梭
と云ふ。織
具の機梭。織
具の機梭。織

雪の降り堂を積り
形容するなり云
へ。香積世界に
の異稱。飯
處を摩の香積
處を取りたる飯

速に佛果を成ずる底の一句子なり。然も是の如しと雖も、留別の一曲如今如何が謳歌せむ。嘆。樵父は柴を擔ひて白雲に笠さ、漁翁は釣を垂れて青波に棹す。

機梭速成佛果底一句子
也。雖然如是留別一曲如
今如何謳歌。嘆。樵父
擔柴笠白雲。漁翁垂釣棹
青波。

同 (十二月)

冬風凜烈として煤香を吐き、寒月沈々として夜光を發す。白玉堂前千樹の雪、人間樂しむべきは是家郷。夫以みるに、(名) 蓋天蓋地自己の靈光速に香積世界に到らば、氷霜飛雪共に妙光直に蓮花界に生ぜば、梅樹の

冬風凜烈吐煤香。寒月沈
沈發夜光。白玉堂前千樹
雪。人間可樂是家郷。(陽
夫以。(入名) 蓋天蓋地
自己之靈光。速到香積世
界。則氷霜飛雪共妙光。直

●三光の三日
●月星の三光
●なり光陰に
●用ふ。含識。有
●情の動物。有
●即ち意識をも
●具へたるをも
●を云ふ。

清光等しく穢郁たり。這裡に至りて
何の處に向ひて去らむ。咄。白雲深
く鎖して尋ねるに處なく、寂々たる
妙相世縁を離る。

正當臘月歲花散じ、曷に去る三光喚
べども還らず。含識從來此節あり、
過ちて生死海中の船に跨る。夫れ以
みるに、(名) 身は法界に分ち、心は
大千に付す。生元不生、百川悉く海
に朝し、滅も亦非滅、万法皆禪に歸
す。這邊遊戯三昧、頭々堅固。右轉

生蓮花界。則梅樹清光等
穢郁。至這裡向何處去。
咄。白雲深鎖無尋處。寂
寂妙相離世縁。

同 (十二月)

正當臘月歲花散。曷去三
光喚不還。含識從來有此
節。過跨生死海中船。(先)
夫以。(入名) 身分法界。
心付大千。生元不生。百川
悉朝海。滅亦非滅。万法皆
歸禪。這邊遊戯三昧。頭頭

▲那落。梵
語。那落迦
の器。譯云
て地獄と云
ふ。黄泉。よ
△黄泉。よ
み即ち死後
の處なり。

左轉、自由自在、物々完全。甚麼の
轉凡入聖とか説かむ。甚麼の那落黄
泉とか謂はむ。維れは斯れ三界を出
離する説談なり。即今這箇の一靈、那
頭にか安著せむ。咄。看よ掌裡に鉄
子を放下すれば、脱殻の烏龜倒に天
に上る。

臘月正當す三十日、末後の一句更に
端なし。一機頓に現す無生の國、遊
びて電光石火の間に在り。夫以みる
に、(名) 來々實に不來、竹影階を拂

堅固。右轉左轉。自由自在。
物々完全。甚麼説轉凡入
聖。甚麼謂那落黄泉。維斯
出離三界説談也。即今這
箇一靈。安著那頭去。咄。
看掌裡放下鉄子。脱殻烏
龜倒上天。

同 (十二月。男子)

臘月正當三十日。末後一
句更無端。一機頓現無生
國。遊在電光石火間。(刪)
夫以。(入名) 來々實不

● 略 閻 羅 王 地 獄 衆 生 之 罪 業 之 所 由 也 公 平 之 治 罪 之 司 也 然 亦 有 其 不 公 平 之 事 也

ひて塵動ぜず。去々實に不去、月は潭底を穿ちて水に痕なし。去來寂滅にして乾坤に獨歩す。これは是れ信士平生自受用三昧の一句、那箇か是れ不死底。喝。臘月の火、山を焼く

來。竹影掃階塵不動。去去實不去。月穿潭底水無痕。去來寂滅。獨步乾坤。這是信士平生自受用三昧一句。那箇是不死底。喝。臘月火燒山。

同 (十二月女子)

幻生幻滅夢更に夢、脱落身心端的の中。獄卒と、閻羅と見ざる處、本來の面目是れ眞空、夫れ以みるに、(名)意氣天然別なり。神筆畫けども成らず。然も是の如くなりと雖も、(名)變遷

幻生幻滅夢更夢。脱落身心端的中。獄卒閻羅不見處。本來面目是眞空。(東)夫以。(入名)意氣天然別。神筆畫不成。雖然如是

に涉らざる底の一句如何が委悉せむ。咄。試みに枝頭の雪を搖せ、定めて夜來の花あらむ。

(入名) 不涉變遷底一句如何委悉。咄。試搖枝頭雪。定有夜來花。

其二 四季引導法語例

呼應馥郁たり含花の辰、發却すれば完全便ち是れ春。問はひと擬す此の中啼鳥の曲、沒弦琴上笑ひ閻々。伏して以みるに、(名入る)生や三界城を出て、死や十方空に入る。實に闇昏昏裡を踏破し、頓に白毫光中に到着す。面目也た好し、安身了するこ

呼應馥郁含花辰。發却完全。便是春。擬問此中啼鳥曲。沒弦琴上笑閻々。伏以。(入名) 生乎出三界城。死乎入十方空。實踏破闇昏昏裡。頓到著白毫

◎ 沒 弦 琴 空 理 之 喻 琴 容 悅 之 貌 形 和 佛 之 眉 間 光 放 之 智 慧 佛 之 眉 間 光 放 之 智 慧

★前の月次
引導と稍趣
きを異に
し、時候に
みにて一般
に通ずるも
の二三を録
せるなり

とは箭よりも速に、歸穩坐すること
は絃よりも直し、這裡に到りて己靈
放光の一句何を以てか諾せむ。咄。
氣を追ひ香を尋ぬる客、得來りて紅
日新なり。*

臺前の景色花を帯びて新に、楊柳の
兩眉點塵を没す。分明に識得する底
を見むと要すや、春風影裡去て身を
藏す。夫以みるに(名)三千界中芳
髓を放ち、寂光堂上、斷弦を和す。
好不味の面目、婦女身を轉却し、醒

光中。面目也好。安身了於
箭速。歸穩坐於絃直。到這
裡己靈放光一句以何諾。
咄。追氣尋香客。得來
紅日新。

下 火 (春女子)

臺前景色帶花新。楊柳兩
眉沒點塵。要見分明識得
底。春風影裡去藏身。(真)
夫以。(入名) 三千界中
放芳髓。寂光堂上和斷弦。
好不味面目。轉却婦女身

△眼裏花
を眼、裏花
を見るの妄
覺。

覺の力量、涅槃の岸に落著す。實に
沒蹤斷息、身を花裡の紅席に安ず。
然りと雖、信女何を以てか恁麼の消
息に代へむ。這裡に到りて代る底の
手段を忘却すと道は、爲に垂示せ
む。咄、鳥啼て處々香曲を吐き、調
へ梅花に入て比倫を絶す。

白鷺田に下る千點の雪、黃鶯樹に上
る一枝花。此の中、生滅著くるに
處無し、地獄と天堂と眼裏の花。恭
しく以みるに、(名) 往昔不生なれど

醒覺力量。落著涅槃岸。實
沒蹤斷息。安身花裡紅席。
雖然。信女以何乎代恁麼
消息。到這裡。道忘却代底
手段。爲垂示。咄。鳥啼
處處吐香曲。調入梅花絶
比倫。

同 (春)

白鷺下田千點雪。黃鶯上
樹一枝花。此中生滅著無
處。地獄天堂眼裏花。(麻)
恭以。(入名) 往昔不生

口湘潭。支
那の地名。
今湖南長
沙府屬縣
の治所。
*巴蜀支
那の地名。
巴州、蜀
州、寧州、
州、保州、
川州、寧州、
今四川屬
都府の治所。
今府の治所。
都府の治所。
今府の治所。

も生を現ずる何十年、月は潭底を穿ちて水に跟なし。即今不滅なれども滅を唱ふ、一彈指頭、竹影塔を拂ひて塵動かす。故に云ふ、却り來りて世間を觀すれば猶ほ夢中の事の如しと。正與廢の時、(名入る)安身立命の處を要すや。(一拂して云く)湘潭雲盡きて暮山秀て、巴蜀雪消して春水來る。

而現生何拾何年。月穿潭底水無跟。即今不滅而唱滅。一彈指頭。竹影拂塔塵不動。故云。却來觀世間猶如夢中事。正與廢時。(入名)要安身立命之處。(一拂云)湘潭雲盡暮山秀。巴蜀雪消春水來。

【備考】猶、夏、秋、冬に涉りて、各、範例を示すべき順序なれど、前章各月次の中に攝めあれば、今は略す。

(二)乍入と
は入つた
か入つた
林に入つ
ぶかりと
ふことと
云

(二)破布囊
程云々は
林類聚に
つ

第四編 問答及法問

第一、問答 (其二)

一問、某甲乍入叢林請師一句を指示し玉へ

答、近離何れの處ぞ
問、不來の相にして而して來る

答、恁麼にし來る者は又是誰ぞ

問、佛祖も又識らず
答、漆桶を打破し來れ

問、妄想して甚麼とかなす
答、打破了也

二問、破布囊裏の眞珠識者方に知る是れ寶なる事を、和尚作麼生か識得す

問、百雜碎

答、擊たずんば碎瑕類増
二問、古人曰く目前に法無く、

(三)卓々と
はげだかき
勝れたる勢

(四)兩賽は
アイゴと云
ふ義

(五)一種平
懐云々は信
心銘の文な

意目前に在り是れ目前の機な
らず、是れ目前の法ならず、
耳目の到る所に非ず、如何が
是れ耳目不到の一句

答、卓々として物に依らず
問、學人不會、請ふ和尚速に
道へ

答、七尺單前に向つて承當
して看よ

四問、迷中に悟有り、悟中に迷
有り、某甲迷と悟とを問はず
二途を離れて請ふ和尚仔細に

道へ

答、小魚大魚を吞む
問、早く是れ兩箇と成る
答、兩賽々々

五問、機を明にして自ら味ま
し、慮を息めて源に迷ふ、語
黙顯し難し、肯語全からず此
外作麼生か相應する事を得ん

答、一種平懷なれば泯然と
して自盡
問、無事甲裏に颯在する事莫
れ

(七)築著磻
者は碧巖録
にあり

答、無事是れ貴人
六問、禮は玉帛に非ざれば露れ
ず、樂は鐘鼓に非ざれば傳は
らず(坐具を擧して曰く)這
箇何を以てか傳ふる、
答、(柱狀を擧して曰く)見
るや

問、是れ同か是れ別か
答、汝看取せよ
問、別々不別

答、差過了也
七問、牟尼西天に在らず、仲尼

東魯に居せず、畢竟甚れの處
にか在る

答、(圓相を打して云く)總
に這裡に在り
問、作麼生か相見せん
答、築著磻着

八問、北翟廬州の長粳米食す
る者は喜もなく、又憂も無し
と、如何が是れ長粳米

答、汝か面前に抛向す
問、乞ふ師些子を分て
答、滿瓶傾け出さず大地に

龍の住めるは
池の杜のありの
詩にありの
（二三）四塞
狼煙云々は
江湖集に出
なり古詩の句

飢人無し

問、什麼としてか凡有り聖有る

答、天は是れ天、地は是れ地

九問、言句に涉らず模様を成さず請ふ和尚最上第一の法門を説き玉へ

答、咄々

問、未在更に道へ

答、句に滞る者は迷ふ

一〇問、如何が是向上宗乗の事

答、柳は自ら緑、花は自ら紅

問、境を以て人に示すと莫れ

答、目前に法無く意目前に在り

問、恁麼々々

答、肯ふとさんば根塵に墮す

一一問、千思萬慮休まんに如かず、千言萬語歇まんに如かず、和尚甚麼としてか玄と説き妙と談ず

一三問、忽ち鐵馬に騎つて重城に入時如何

答、闔外の安危謀已に成る、(師打つと一棒)

一四問、四塞の狼煙断えて九天鳳瑞新なり

一四、問趙州云ふ諸人は十二時に使はれ我は十二時を使ひ得たりと和尚還つて使ひ得るや

答、是

問、作麼生
答、早朝粥を喫し、夜後一

答、方便門を開いて眞實相を示す

問、二に落ち三に落つ

一二問、透網の金鱗未審し何を以てか食と爲さん

答、汝が網を出て來るを待つて汝に向つて道はん

問、湫を傾け嶽を倒す

答、一鉤に即ち上る
問、金鱗は竿頭上に在らず
答、遲了八刻

二六遺次
顛沛とは僧
の語、一
寸の間に
と云ふ義

寢す

問、某甲も亦た是の如し

答、似て同じからず

一五問、把住放行は古人の手段
乞ふ師如何んが接せん

答、喫茶去

問、這箇は是れ衲僧家尋常の
事

答、平常心是道

一六問、宗門中に更に千聖不傳
底の一路有り、如何が進歩す
るを得ん

答、造次顛沛

問、是れ何人の境界ぞ

答、道はず

問、甚と爲てか云はざる

答、明破すれば即ち中らず

問、説破了也

答、聽則ば耳聾す

一七問、會て聞く和尚の舌上
龍泉劍を秘すと是なり也否や

答、是々

問、請ふ一揮せよ看ん

答、見也

一七阿刺
々々は恐ろし
いぞ又はア
いこはやな
ど云ふ義

問、阿刺々

答、作麼生か近傍せん

問、劔刃上に行き、氷水上
に走る

答、頭落つるも亦知らず

問、能く死する者は能く活す

答、死活に涉らず一句作麼
生

問、不取不捨無爲無相にして
活潑々

答、葛藤窟裡を回頭し來れ

一八問、叮嚀は君徳を損す無言

實に功有り甚んと爲か恁麼に
吧々地なる

答、官には針を容れず私に
は車馬を通ず

問、佛法豈人情を容れざらん
や

答、誰か知らん錦繡腸中
に鱗鱗の句あるとを

一九問、寧ろ阿羅漢に三毒有り
と説けども如來に二種の語有
りと説かず、如何が是れ如來
の語

二二晒
々々小兒
争する
恐るる
鏡

○(二〇) 圈續
は定まれば
模倣なり

答、道はじ
問、父母所生の口誰か和尚をして啞却せしむ

答、至理言を忘す
問、話墮了也

二〇問、一段の光明古今に亘る如何なるか一段の光明

答、光り萬像を含む四海九州

問、猶是れ日下の孤燈
答、管を以て天を窺ひ蓋を以て海を測る

二二問、佛を殺し祖を殺すも盡く古人の圈續に落つ、棒を行ひ喝を行ずるも今時の窠臼和尚此外何を以てか人の爲にせん

答、平常の言語を以て人を活殺す

問、如何が是れ平常の言語
答、飯を喫し來れ

問、若し是れ本分の衲僧ならば這般の茶飯を喫せず
答、大徳

○(二二) 朝打
云々は雲門
の語禪林類
聚に出づ

問、諾

答、早く是れ喫し了れり

二三問、向上の鉗鎚を明らめんと要せば須く是れ作家の爐鞴なる可し、某甲即今師の爐鞴に入る如何が鉗鎚を下さん

答、朝打三千暮打八百

問、老婆親切

答、金は再煉して須く精なる可し

問、(坐具を擧げて云く)眞金百煉して紅爐を出づ

○(二三) 鶴は
毛皮の衣也

答、(柱杖を擧げて云く)眞金色を失す

問、一金萬器と成る事は、皆匠者の功に因る

二三問、梅檀葉々香風起る、誰か是香を聞く者ぞ

答、人々鼻孔遼天

問、某甲何に依つてか聽く事を得ざる

答、鼻觀不通

問、甚の爲めぞ
答、旗を荷ひ蓋を被る者は

(二五)叩々
は深く問ひ
尋ねると也

共に純綿の麗蜜を道ひ難し

問、香界に入て香惑を蒙らず

二四問、胸襟の寶藏を豁開し自

己の家珍を運出す、家珍を運

出して某甲を賑濟せよ看ん

答、看る也

問、破草鞋

答、拵じ來れば瓦礫も是れ

黃金

問、魚目を將て明珠と作す事

莫れ

答、終に人に賣與する事を

不知

二五問、衲僧門下叩々を用ひず

和尚誰に憑てか堅説横説する

答、禮は玉帛に非ざれば露

れず

問、千言萬語一黙に如かず

答、言天下に満ちて曾て口

に過無し

問、這裡是れ何の所在を鹿と

説さ細と説く

二六問、若天下に行ぜんと要せ

ば一藝強きに過ぎたるは無し

(二六)一超
云々永嘉大
師證道歌の

和尚什麼を以てか一藝と作す

答、百尺竿頭に一步を進む

問、猶是れ小機量

答、汝底作麼生

問、一超直入如來地

答、奴兒婢兒

二七問、三世諸佛説く事を會せ

ず、歴代の祖師道ひ盡さず、

這箇の句中和尚還つて道ひ得

る麼

答、何の難き事か之れ有ら

ん

問、作麼生

答、眉毛眼上に横る

問、只口を開く事を知つて話

墮する事を覺らず

答、草木意無し風搖がせば鳴

る

二八問、作家の禪客宛爾として

同じからず、和尚如何んか接

す(師打す、僧座具にて打す)

答、遲也々々

二九問、若し人心を識得すれば

大地に寸土無し、未審し識得

(二九) 回過
はのがる
こと

底の人什戸の處に向つて居す

答、當處を離れず

問、(打つて曰く) 作麼生か回避せん

答、大に竹を接いて月に點

ずるに似たり

問、什麼と道ふぞ

三〇問、倒に少林の無孔笛を把

つて逆風に吹き了つて順風に

吹く、即今和尚和し得てんや

否や

答、是

問、即今和せよ看ん

答、聽く麼

問、誰か聽取せざる

答、汝作麼生か和す

問、即 喝す

答、又風に別調の中に吹か

る

三一問、大圓鏡裏箇の禪の字を

説くも早く是れ痕を生ず、無

痕の一句作麼生か道ん

答、咄々

問、早く是れ痕を生ぜり

(三一) 羚羊
は圓く繞れ
る盛文ある
羊なり

答、角を掛る羚羊跡を見ず

問、無痕是れ痕

三二問、徳山門に入れば便ち棒

し、臨濟門に入れば便ち喝す

和尚の此門何を以てか人を接

せん

答、只是々

問、是れ什麼ぞ

答、千聖從來伊を識らず

問、只箇の不知不識の四字正

に是れ三世諸佛の骨髓、一大

藏經の根源

答、破木杓

三三問、家の豊儉に随つて作用

同じからず故に五家の別有り

吾が宗門底に落ちざる底の一

句子作麼生

答、黒漆の崑崙夜裏に走る

問、是れ何の心行ぞ

答、天下皆な知る

問、今日作家に逢ふ

答、作家相見の時如何

問、能縦能奪能殺能活

答、(柱杖を擧して曰く) 這

(三三) 黒漆
云々碧巖に
出づ没蹤跡
の様子なり

(三四)保社は相濟くる團體を云ふ

(三五)波斯は今のペルシヤ人也

簡作麼生か殺活す

問、妄想する事莫れ

答、作家

三四問、多年劍客を尋ねて今日作家に逢ふ、作家相見の時如何

答、喫茶去

問、誰か和尚の保社に入らん

答、汝の見處那裏よりか得たる

問、和尚乞ふ辨ぜよ

答、口を開けば便ち膽を見

る

問、耻羞々々

答、(打して曰く)這の賊

三五問、達磨來る時此土皆梵語を知る西天に去るに及んで、

悉く唐言を會すと、若し直指人心見性成佛を論せば梵語と爲んや唐語と爲んや

答、兩頭共に不是

問、是處作麼生

答、普

問、是れ何の語話ぞ

(三六)少林は達磨大師の上嵩山少林寺に居らるるを云ふ

答、波斯大唐に入る

三六問、少林の一語舌頭上に在らず作麼生か是れ少林の一語

答、道じ道じ

問、何としてか道はざる

答、少林の一語舌頭上に在らず

問、爲人の分有る事無しや

答、誓て佛法を以て人情に當らず

三七問、唐虞に逢へば則禮樂、桀紂に逢へば則ち干戈、忽ち

(三七)唐虞は禮樂の世、桀紂は亂世也

不思議不思惡底の禪客に遇ふ又作麼生

答、(便ち打す)

問、過何れの處にか在る

答、青天も亦須く棒を喫すべし

問、龍蛇は辨じ易く衲子は謾

難し

答、(又た打つ)

三八問、單刀直ちに魔軍の陣に入つて戦ひ勝つて何を會て一人を殺さん、既に是れ戦ひ勝

(三九)劫火
云々は圓悟
録にあり

(四一)神仙
云々は圓悟
録にあり

つ何と爲てか一人を殺さざる
答、賊は是れ家珍の親
問、與麼ならば何ぞ戦を用
ひん

答、文王一たび怒つて天下
を安んず

三九問、劫火洞然として毫末盡
く青山舊に依つて白雲の中と
既に是れ毫末盡く何と爲てか
青山壞せざる

答、他に隨ひ去つて他に隨
はず

問、鑑

答、病眼空華を見る
四〇問、美玉精金定價無しと貴
と爲さず賤と爲さず如何んが
價を酬いん

答、百雜碎

問、狼籍少からず

答、風流ならざる處也風流

四一問、神仙秘訣父子不傳と如
何が是れ不傳底の秘訣

答、(拂子を擧して曰く)會
也

(四二)瞎は
盲目又は一
目無きを云
ふ

問、一見便見

答、視著すれば便ち瞎す

問、再看に勞せず

四二問、雲門は乾屎橛趙州は栢
樹子と和尚底又作麼生

答、當的底都帝僧

問、耳を掩ひ去らん

答、多音耳に屬す

問、(僧顧みず)

四三問、纒に是非有れば紛然と
して心を失すと、如何なるか
是れ是非不到の一句

(四三)三祖
大師信心銘
の句なり

(四四)盟誓
は釋尊の
勝答摩訶
勝と翻す

答、喝

問、棒喝交々馳するも盡く古
人の罔續く落つ

答、其境に在つて其境に墮
せず

問、狗口を合取せよ

答、疥狗生天を願はず、却
て雲中の白鶴を笑ふ

四四問、達磨未だ心地の印を傳

へず、釋迦未だ髻中の珠を解
せず、此時若し西來意を問は
ば還つて西來意有りや無しや

(四五)下惠の
は柳下惠の
孟子は聖
の和なるも
のなりと贊
せり
(四六)若し
云々は金剛
經の意なり

答、無しとは道す

問、作麼生々々々

答、路は平處より峻し

問、與麼ならば瞿曇の出世勞して功無しや

答、佛は是れ船筏の海士

四五問、佛祖從來人の爲にせず

和尚甚と爲てか人の爲にす

答、能く下惠を學ぶ者は其跡を印せず

問、靈龜尾を曳く

答、甚だ人の威光を減す

問、理を曲げて斷せず

答、強詞正理を奪ふ

四六問、若し諸相を非相と見れば即ち如來を見ん、恁麼ならば何れの處に向つてか如來を見ん

答、不見の相にして而して見よ

問、佛は甚んの處にか在る

答、汝が眼睛を刺破す

問、見れども見えぬ

答、是れ誰が過ぞ

(四七)五無
問業とは一
害母二害父
三害羅漢四
破僧五出佛
身血なり
(四七)護生
云々禪林類
聚八に出づ

問、識らず

答、瞎

四七問、五無間の業を作つて大

解脱を得と既に五無間業、什

麼と爲てか解脱を得る

答、護生は須く是れ殺す

べし、殺盡して始めて安居す

問、如何んか殺す事を得ん

答、一念不生前後際斷

四八問、若し此の事を論ぜば兩家の基を著くる如しと、請ふ

師一著

答、(圓相を打して曰く何處に向つて出頭し去る

問、基は敵手に逢つて行を藏し難し

答、且く道へ黑白未分の時

如何んが一著を下し得ん

問、(便ち拂袖して去る)

答、敗也

問、(顧視して云く)著々出身

の路有り

答、遅也々々

(四八)基逢
敵手云は普
燈録にあり
詩到重吟始
見功等値始

音始好彈の
句あり
(四九)灼然
は明了の意
也

四九問、行住坐臥這箇を離れず

是何者ぞ

答、背後縛

問、學人不曾仔細に呈露し玉

答、向はんと擬すれば便ち

背く

問、灼然々々

五〇問、諸佛未だ法輪を轉ぜざ

る時佛法那裏にか住持す

答、滿目青山

問、與麼ならば佛出世して何

をか作す麼

答、一大事因縁の爲めの故

に世に出現す

問、作麼生か是れ一大事因縁

答、三生六十劫

五一問、某甲に一百問有り乞ふ

和尚一句に答へよ

答、(喝す)

問、話兩概となる

答、一と去却し七と拈得す

問、舌頭骨無し

答、從來の妙唱は舌に干か

(五〇)一大
事因縁云々
は法華經方
便品にあり

(五二)掠
虚とは頭なき
とを頭と思ひ
て奪ひ合ふと
者云ふと第十
則に在り

らす

問、只口を開くを知つて話會

する事を知らず

答、這漢元來人の舌頭を取

る

五二問、若し佛法を將て人情に

當てば未だ眉鬚脱落する事を

免れず、佛法を破除して向上

に提持せば地獄に入ると箭を

射るが如し、與麼ならば和尚

如何んが人の爲にし去らん

答、兩頭共に坐斷して八面

に清風を起す

問、爲人底作麼生

答、會せんと要せば直下に

會せよ

問、會と不會と都來是れ錯

答、掠虚頭の漢

五三問、此事實に言句上に在ら

ず恁麼ならば兩片皮を動かさ

ず如何が祇對せん

答、聞也

問、好言語々々々

答、我會て一字を説かず

(五三)琴中
云々陶淵
明の句

(五四)佛以
一音云々
維摩經にあり

(五九)吹毛
劍は胡會の
詩に常時已
有吹毛劍何
事無人殺奉
春とあり名
劍の名なり

(五七)震中
は碧巖馬大
師の語にあり
り
(五八)唯蘇
唱々々々は
禪林句集に
大施餓鬼の
死を引けり
其意未考
(五九)達磨
も觀音志公
も觀音の志
碧巖錄に在

問、若し琴中の趣を識らば何ぞ弦上の聲を學ばん

答、我從來此漢を疑著す

五四問、佛以一音演說法衆生隨類各得解、一音什と爲して各得解なる

答、一金萬器となるは皆匠者の功に因る

問、衲僧門下功勳を絶す

答、功は無功に到つて汗馬高し

五五問、單刀一直籌帷に入る和

尙如何が廻避せん

答、三尺の吹毛劍を横拈して三千里外に人の頭を把る

問、(舉ニ座具ニ云)這箇を如何

答、(打して云く)斬

問、刀斧斫れども入らず

答、露柱に問取せよ

五六問、昔日六祖座具を以て曹溪の四境を一展す、喚んで神通とや爲ん、又本體如然とや爲ん

境に墮す語黙を離却して作麼生か道はん

答、唯蘇唱々々々

問、猶唇吻に掛くる事在り

答、溪邊の玉女阿々大笑

五九問、達磨も是れ觀音志公も

是れ觀音且く道へ那箇か是れ眞跡

答、別々不別

問、畢竟作麼生

答、大士應身三十二

問、退いて相見する麼

答、總に不恁麼

問、作麼生

答、坐して把得住するを

斷ずるを得ん

五七問、十界は心より生ず心何

處よりか生ず

答、蕩々乎として民能く名

づくるなし

問、更に道へ

答、震中は天子の勅、豈に

禹湯堯舜を假らんや

五八問、黙は陰界に沈み語は塵

(六〇) 鐘經は支那の書家の名なり

(六〇) 八角の磨盤云々 虛堂錄三にあり

(六一) 無孔の鐵鎚云々 禪林類聚に在り

(六三) 劍は云々は從容錄にあり

答、築著磻著

問、一身三十二重ならば則ち非也

六〇問、虚空呈露す大人の相、妙手鍾繇描けども成らず、如何が是れ大人の相

答、八角の磨盤空裡に走る

問、虚空を弄して何とか爲す、答、這裏に實無く虚無し

六一問、十二時中如何んが空過せざる事を得ん

答、念起れば即ち覺す

問、作麼生か覺するを得ん

答、只諸有を空ぜよ、諸の實を無とする事勿れ

六二問、人を驗するに端的の處口を下せば即ち知音、和尚何を以てか人を驗せん

答、無孔の鐵鎚當面に抛つ

問、我這裏此の如きの閑家具無し

答、果然として提不起

六三問、劍は不平の爲に寶匣を離れ藥は病を療するに因つて

金瓶を出づ、和尚の法柄何に依てか撥揮す

答、之を以て佛祖不傳の妙を撥揮し之を以て衲僧衣下の功を契證す

問、破草鞋那邊に抛向せよ

答、地に擲てば金聲を作す

六四問、若し一句に向つて薦得せば佛祖の爲めに師と爲るに堪へたり且く道へ是れ那箇の一句

答、石鳥龜の下語せんを待

つて汝に向つて道ん

問、藏せば彌々露はる

答、法々隱藏せず古今常に顯露す

六五問、文殊は是れ七佛の師文殊還つて師有りや否や

答、有り

問、速に道へ々々々

答、狸奴白牯

六六問、問有り答有り古人の圈續に落つ更に一箇の聲を作さ

(六四) 石鳥龜とは石の龜を黒き龜を云ふ鳥龜向火從容録の第三則にあり

(六五) 文殊は七佛の師なりと「放鉢經」の辭に依る佛

言我今得佛
是文殊過去
本師過去無
殊諸佛皆文
殊弟子とあ
り
(六七)捏怪
は怪しいぞ
と云ふほど
の意
(六八)春色
高下云々は
普燈錄に出
づ

ず氣を作さざる底の人あつて
出來る時和尚如何んが祇對せ
ん

問、其人今何に在る
答、面前露堂々

問、過什麼の處にか在る
答、(即ち打つ)

問、更に有過無過と道はん
答、(又打つ)

六七問、一人は孤峯頂上に在つ
て出身の路無く、一人は十字
街頭に在つて亦向背無し、那

箇前に在り那箇後に在り乞ふ
和尚辨じて看よ

答、捏怪々々

六八問、衆中金を淘す誰か是れ
得ざる者ぞ

答、誰か是れ得ざる者ぞ

問、何を富む有り貧しき有る

答、春色に高下無し花枝自
ら短長

六九問、周孔の道は世を經ひる
に宜しく釋迦の道は出世に宜
し和尚の説法箇の什麼にか宜

しき

答、總に相宜し

問、恁麼ならば某甲を賑濟せ
よ

答、滿瓶傾け出さずして大
地に飢人無し

問、漏逗少からず
答、前三々後三々

七〇問、三界無安猶火宅の如し
と與麼ならば學人甚の處に向
つて清凉を得ん

答、心頭を滅却す

問、如何が滅却する事を得ん
答、笑談して洞上の宗風を

(六九)漏逗
はモリトホ
ルの意
(七〇)三界
云々は法華
譬喩品にあ
り
(七一)強將
云々は蘇軾
連公の壁に
題する文に
あり

(七二) 窠白
とは窠窟の義
今窠窟の義
戰を取るの
(七三) 蝦云
々は則に八
十九則に出

(七四) 四塞
云々(一三)
にあり

起し願眊して邪師の窠白を
破る

問、猶是れ小伎倆

答、筋刀を將て能と爲さず

問、生蛇竹筒に入る

七三問、貧を抜いて富と做す學

人清貧請和尙賑濟せよ

答、貧道も無一物

問、多事生

答、見處那裏よりか得來る

問、無一物の處般々受用

答、作麼生か受用し去る

問、空手に來り空手に去る
答、頂上の鐵枷何ぞ脱せざ

るや

問、佛祖の縛を廢拂して、繩

墨の外に曠然たり

答、蝦跳れども斗を出てす

七四問、四塞狼煙斷え、九天鳳

瑞新なり什麼としてか法戰に

趣く

答、許さず將軍の太平を見

問、如今四海清うして鏡に似

(七六) 案山
は嵩山、案山
諸山は淮南の
岩の天童録
山は前是案
山は後あり主
長安に大通
僧とは趙州
也とは問答

たり行人道の爲に冤と爲ると
勿れ

七五問、二儀萬像の根源に徹し

て、諸佛歷代の性命を識る、

如何が是れ萬像の根源

答、道はず々々

問、啞す耶

答、罵れども瞋らず欣ばず

七六問、水鳥樹林悉く皆念佛

念法と、且く道へ案山と主山

と箇の甚の法をか説く

答、露柱に問取せよ

問、縦令道ひ得るも是れ箇の
木概

答、一箇の泥團を弄する漢

問、進んで默然たり

答、(亦默然たり)

問、(急に拂袖し去る)

答、葛藤少なからず

問、問答太だ分明

七七問、十方薄伽梵一路涅槃門

未審し路頭什麼處にか在る

答、大道長安に透る

問、甚んと爲てか透不過なる

(八七)巴は
四川省の地
名
(八七)一
曲
云々碧殿三
界無位の頌
にあり本心
(八八)本心
云々禪林句
集に出づ

中を犯さず君臣偏正は問はず
如何が是中

答、止々不須説

問、甚と爲てか道はざる

答、我若し言はば我口を啞
却せん我若し言はば我舌を
縮却せん

問、問處分明なれば答處親し

八五問、金剛寶劍を握つて葛藤
を截断すと和尚亦是の如き寶
劍有りや

答、無しとは道はず

問、粗に鋒銛を露はせ

答、(打して曰く)看也

問、好箇の金剛王寶劍、用つ
て泥を切り去んや

答、輕々に觸著すれば腰切
と成り股断と成る

問、法の爲にする者は喪身失
命を恐れず

答、侍者々々此死漢を挽出
せよ

八六問、柱杖子乾坤を吞却し了
る山河大地何の處より得來る

答、喝

問、是れ何の曲調ぞ

答、一曲兩曲人會する無し
雨過ぎて野塘秋水深し

八八問、肯へば未だ根塵を脱せ

ず肯はずんば生死に沈淪す、
肯はざる底は且く措く、肯は
と甚に因つてか根塵を脱せざ

る

答、本心本性を識得するも

正に是宗門の太病

問、和尚作麼生か醫する事を

八七問、石女巴歌を解す、和尚
還つて和し得る麼

問、祖師の玄機破草鞋
答、三寸の舌を將つて祖師
の心を謾味する事莫れ

問、打つ事は便ち備が打つ
に任す要且つ祖師音無し

問、(柱杖を接して便ち打つ)
答、打つ事は便ち備が打つ

問、柱杖子何處にか在る
答、(左右を顧視して云く)
有り(便ち打つ)

答、柱杖子に問取せよ

(九〇)扶云
々は無門關
四杖の芭蕉
柱の頰に
在り
(九一)麒麟
關は漢書の
蘇武傳に
あり
蘇功臣十
一人を
處也
處を
處に
處に
處に

得ん

答、佛手も亦他を醫する事

能はず

八九問、言詮不及の處作麼生か

道はん

答、言詮に涉らず問ひ將ち

來れ

問、和尚(と喚ぶ)

答、諾

問、我早く問ひ了れり

答、我已に答へ了れり

問、舌頭長し

か、無しと道人ぞ

答、唯言説のみ有つて都て

實義無し

問、蒼天々々

九二問、劫火洞然として大千俱

に壞す未審し這箇壞か不壞か

答、汝に口有るを待つて道

はん

問、甚んぞ早道はざる

答、言ふ事は即ち辭せず、

恐らくは紙筆に上らん

問、説破了也

九〇問、人平にして語らず水

平にして流れず杖子平

なる時は如何

答、乾坤に逼塞す

問、如何んか受用し去らん

答、扶けては斷橋の水を過

ぎ伴うては無月の村に歸る

九一問、今代の麒麟閣、何人か

第二の功

答、大唐を打破して一人も

無し

問、人々鼻孔遼天什麼として

答、鐘を喚んで甕と爲すと

莫れ

九三問、一切の諸佛皆此の經よ

り出づと如何が是れ此の經よ

答、拂子を拈じて云ふ(只

這れ々々

問、是れ何の經ぞ

答、名け難し

問、和尚請轉せよ

答、止みね々々不須説

問、既に轉じ畢んぬ

答、鵝鳴鵲噪

(九二)蒼天
々々は遠天
の戦にい
用ふ

(九四) 耳朶
は耳たぶの
云々會元十
一にあり

九四問、我手裡一卷の詩在り孔
老も詠ずる事能はず和尙誦じ
得るや否や

答、我が爲めに緇け

問、進んで座具を拈起す

答、聽き得て精ならず

問、我に耳朶を返し來れ

答、各自に封疆を守る

九五問、萬法盡く空す識性も

亦た爾り、恁麼に道ふが如さ

んば、人没して後心有りや否

や

答、有無とは道はず

問、作麼生

答、大虛無際落堂々

九六問、妙と説き立と談ずるも

太平の姦賊、棒を行ひ喝を下

すも亂世の英雄如何是れ棒喝

不到の一句

答、木鷄子夜に鳴き芻狗天

明に吠ゆ

問、猶唇吻に掛ると有り

答、舌頭の談は談に非ず

九七問、未だ釣を抛たず金鱗浪

(九七) 雲を
撃ひ云々碧
擊ひ六々碧
雲門三級に
浪の處にあ

を衝き來る龍門風雷の勢を
假らず忽ち透得する時如何

答、(柱杖を擧して云く) 這

裡に三級有り

問、雲を撃ひ霧を嘔む

答、未審し多少の風を消得

す

問、這箇は且く措く如何なる

か是れ獨露無私の一句

答、露

問、是れ什麼の熱枕鳴聲ぞ

答、此磊苴虚空の爲めに耳

穴を安ず

問、衲僧の氣息天然是の如し

答、一丈を説き得るも一尺

を行ふには如かず

問、大丈夫自ら衝天の氣在り

如來の行處に向て行かず

答、這の掠虚頭の漢

問、喝

○答、(打つ)

九八問、有利無利行市を離れず

王老師身を賣る事は且く措く

盧陵米作麼生か價を酬いん

三九八
三九二
三九一
三九〇
三八九
三九八
三九二
三九一
三九〇
三八九

九〇九
九〇八
九〇七
九〇六
九〇五
九〇九
九〇八
九〇七
九〇六
九〇五

答、一六三四二
問、海神貴を知りて價を知らず

答、汝底作麼生
問、前三々後三々

九九問、祖師の心印形鐵牛の機に似たり何の處に向つてか鐵牛を見ん

答、(打して曰く) 止みね々

問、螻蟻鐵柱を揺かす
答、只此柱更に廻避する處

無し
問、森々たる頭角畫はども成らず

一〇〇問、説く可きの法無し是を説法と名く、既に無法何と爲てか説法と名く

答、無言無説眞の般若

問、如何が是れ眞の般若

答、太野涼風颯々、長天疎雨濛々

一〇一問、天は左旋し地は右旋す(座具を擧して曰く) 這箇

天の四七
東土の二七
と祖の支天
八祖の支天
の六祖の支天
の云ふ祖の支天
の語に多古
用のひありに

如何

答、左を要せば即ち左し右を要せば即ち右せよ

問、畢竟作麼生

答、虚空に逼塞す

問、甚んと爲てか某甲の手裡に入り來る

答、展る則は沙界に逼く收むる則は方寸の中

一〇二問、一句機に當つて即ち家に到ると如何が是れ歸家底の一句子

答、宿蘆庭前風柳を擺ふ

問、誰か是れ歸家穩座の人

答、西天の四七東土の二三

問、和尚又作麼生

答、其機一也

問、快なる哉々々々

一〇三問、佛法を説いて諸人に供養せんと欲せば地獄に入る事箭の如しと未審し這裡爲人底の道理有らや

答、二途俱に涉らず鐵壁危峭々

(一〇五)看
る時云々は
碧摩八十六
則雲門の語
にあり

問、爲人の處作麼生

答、下に衆生の憐むべき無し

一〇四問、古人曰く頭々上に明に物々上に通ずと、猶是借句、如何が是れ不借句

答、陰々たる夏木黄鸝囀る問、錯つて擧する事莫れ

問、擧して願りみざるも還て差互す

一〇五問、維摩の丈室日月を以て明と爲す這裡何を以てか

明と爲ん

問、看る時見えず暗昏々

答、家中目を閉ちて言ふと勿れ月未だ照さずと

一〇六問、如何が是れ和尚の家風

答、鉗錘を秉つて佛を烹り祖を鍛へて衲僧向上の巴鼻を頌出す

問、初て知る和尚に此の機用有る事を

答、讚歎及ばず

問、自領出去

答、退後々々

一〇七問、大圓覺を以て我が伽藍と爲す、心身安居平等性智敢て和尚に問ふ此外更に九句行履の處有りや

答、有り

問、和尚大慈大悲子細に提誨し玉へ

答、事に無心にして、心に無事なれば自然に虚にして

靈に、空にして妙ならん問、無事甲裏に颺在すると勿れ

答、無事是れ貴人造作すると莫れ

問、和尚の慈誨を蒙つて恰も甘露を服するが如し

答、見處作麼生

問、更に全提底の時節有らん只惆悵するに堪へて陳ふるに堪へず

答、人天の眼目堂中の首座

(一〇七)平
等性智は四
智の中にあ
り就て見よ

(一〇八)之
は解制即ち
送行の時
問答の例
制を解きて
東の西に去
時に問答な
れば其つも
りにも用ふ
る也

●高答其三
●晉山其他
●等家用ふる
●作家の漢の
●問答を示す
●ものなり
●(一)之は晉
●山の時は晉
●を掛けたる
●なり

(二)此問答
は光大師
師と僧との
問答なり

(三)兒を憐
みて云々は
無門關の
でたりも出

(三)西來意
の問答甚
だ多し香
録に等水
龍馬祖の
又趙州三
源等あり

問、珍重

一〇八問、(首座師前に進んで

曰)今朝解制堂中學般若の菩薩、或は東し或は西せんと欲す、未審し従前未だ發揚せざる底の蜜語蜜意有る事無し麼
答、無しとは道はず
問、作麼生

第二、問 答 (其二)

一問、和尚今晉山什麼を將てか人の爲にす

答、渺々たる天涯君去る時、浮雲流水自ら相隨ふ

問、如是々々
答、好し去れ
問、金鞭留つて誰か家の酒に當つ、柳を拂ひ花を衝いて馬に信せて歸る

問、(禮拜)
答、喫茶去

答、能く護持せよ

二問、達磨は是れ祖なりや否や

答、是れ祖にあらず
問、既に是れ祖にあらず又來つて箇の甚麼をか作す
答、汝が祖に薦せざるが爲め也

問、薦して後如何ん

答、方に知る是れ祖にあらずるとを

三問、如何是れ祖師西來意
答、西天の人唐言を會せず

問、某甲しも亦た會せず

答、似て同じからず
問、唐言を會せずと云ふ意旨如何
答、唐言を會せず

問、兒を憐れみて醜を覺とらず
答、此の賊

問、賊々(と云て出づ)
四問、如何か佛

答、寐語して甚麼とかなす

(五) 豐儉と
は貧富の義
なり

(六) 宗門を
擧げて問ひ
たる例は五
祖法演の諸
師國元あり

問、(禮拜して退く)

五問、如何が是れ和尚の家風

答、坐臥經行

問、如何んが施設せん

答、家の豐儉に隨ふ

六問、如何が是れ曹洞宗

答、心是佛にあらず智是れ

道にあらず

問、如何んが是れ臨濟宗

答、人を殺すに眼を眨せず

問、如何んが是れ雲門宗

答、左轉右轉

問、如何んが是れ僞仰宗

答、拈じ來たれば著々親

し

問、落々村々楊柳の風

七問、如何んが是れ學人の自

己

答、(拳頭を堅起す)

問、(禮拜して退く)

八問、人死して一靈甚麼處に向

つて去る

答、云、云、云

九問、如何が是れ塵々三昧

(七) 朝打三
千の毛劔と
毛劔の吹
にあり

(二) 今日
失利と今日
武庫といふ
はイカン一
と云ふ程の

答、朝打三千暮打八百

一〇問、如何が是れ吹毛劔

答、天上の一月萬水に現ず

一一問、某甲法の爲めに來る和

尚慈悲子細に示し玉へ

答、喫茶去

問、法の爲めに來る茶の爲め

に來らず

答、汝は是れ少林の客にあ

らず速退々々

一二問、祖意と教意と是れ同か

是れ別乎

答、會する則は教意還つて

祖意、會せずんば祖意還つ

て教意

問、僧今日教師に參ず

答、今日失利

一三問、如何が是佛法の大意

答、一寸の龜毛重き事七斤

一四問、三身の中那身か說法す

答、(柱杖を拈じて打つ)

一問、是れは是れ肉身の說法

答、汝は是れ達磨門下の客

にあらず

(二二) 山名
の處に山名
寺の山名を
入れよ

(二二) 前三
々々々々
殊と無著
の問答あり
に前後から
數へても三
云ふ意

二三問、(山名) 山頂龍飛び鳳舞
ふ和尚什麼を將つてか祇待せ
ん

答、幸ひに柱杖子の有る在
る

問、和尚の柱杖年多少ぞ

答、前三々後三々

問、和尚落草せり

答、僮に勤破せらる

二三問、學人乍入叢林乞ふ師箇
の入處を指示せよ

答、遠つて溪間水聲を聴く

廢

問、聞く

答、這裏從り入れ

問、(惘然たり)

二二答、甚麼ぞ禮拜せざる

問、(禮拜す)

答、是什麼ぞ

二四問、學人未だ其の源に達せ
ず乞ふ師方便

答、是れ甚麼の源ぞ

問、心源

答、(便ち喝す)

問、(禮拜す)

問、什麼を看てか恁麼に禮
拜す

答、

問、(又喝す)

答、(便ち打つ)

二五問、如何是祖師西來意

答、咄咄咄

二六問、如何が是れ臨濟下の事

答、無孔の鐵鏡當面に擲つ

問、如何が是れ雲門下の事

答、八面玲瓏

問、如何が是れ潯仰下の事

答、三年一潤に逢ふ

問、如何が是れ法眼下の事

答、一段の光明古今に亘る

問、(禮拜す)

答、何ぞ曹洞下の事を問は
ざる

問、和尚に留與す

答、巡人犯夜

二七問、如何が是れ正中偏

答、暗裏に文彩を施す

問、如何が是れ偏中正

答、日午に三更を打す

答、

(二六) 巡人
犯夜は方語
盜物は還す
の鐵鏡當面
の鐵鏡當面
林類聚六に
出づ(二七) 五位
の問に問ひ
一問に問ひ
たるに問ひ
答るに問ひ
見はるに問ひ
見はるに問ひ

(三〇)之は
退院小登の
時に用ふる

問、如何か是れ正中來

答、青天白日一聲の電

問、如何か是れ兼中至

答、懸崖に手を撒して魚龍

を辨ず

問、如何か是れ兼中到

答、不疑の地に鉤在す

問、五位一句に作麼生か祇對

せん

答、(拳頭を堅起す)

問、(禮拜す)

答、強て惺々

二八問、如何か是れ透法身の句

答、半邊の鼻孔を露出す

二九問、如何か是れ佛法の大意

答、風吹き日炎る

三〇問、祖意と教意と是れ同か

是れ別か

答、一々問將ち來れ

問、如何か是れ祖意

答、句中に意無し

問、如何か是れ教意

答、句中に意有り

問、有無を離れて一句作麼生

(三一)双劍
云々は碧巖
六五則の下
路にあり

答、汝試に云へ看ん

問、(拳頭を堅起す)

答、(即打つ)

三一問、如何か是れ佛

答、是れ佛にあらず

問、佛にあらずして什麼とか

爲す

答、速退々々他の別人の請

問を妨ぐ

三二問、四句を離れ百非を絶し

て作麼生か示さん

答、南無阿彌陀佛南無阿彌

陀佛

問、双劍空に倚て飛ぶ

答、禍事禍事

問、是は是れ吹毛劍

答、死漢を斬らず

三三問、如何は徳山末後の句

答、他日人無き處に向つて

説き去らん

問、此處人無し請ふ和尚云へ

答、龜毛兎角汝が爲に説法

せん

三四問、如何か是れ禪

答、動容に古路を揚ぐ

問、某甲は然らず

答、汝底作麼生

問、(拳頭を堅起す)

答、此の拳頭其麼處從り出

來す

問、(即ち喝す)

答、(即ち打)

問、屈棒々々

答、屈棒元來人の喫する有

る在り

三五問、一物不將來の時如何

答、放下著

問、已に是れ一物不將來箇の

其麼を放下せん

答、與麼ならば則ち擔取し

去れ

三六問、(出て、禮拜す)

答、汝は是れ凡が是れ聖か

問、和尚鑑取せよ

答、學語の摸恁麼にし去る

問、(無言)

答、果然々々

三七問、咽喉唇吻を併却して作

麼生か道へ

答、松風雨を吹て前山を過

問、舌頭長也

答、老僧住持事繁し

三八問、如何か是れ古人の歌

答、(兩手を展ぶ)

問、何人が唱和す

答、無舌人能く唱和す

問、(禮拜す)

答、徒に車馬の跡を勞す

三九問、起滅不停の時如何

答、(乃ち咄して云く)是れ

誰が起滅ぞ

問、和尚落單せり

答、汝云へ看ん

問、(即ち禮拜)

四〇問、如何か是れ沙門の行

答、父を殺し母を殺す

問、甚麼と爲てか恁麼なる

答、殺し盡して佛恩を報ぜ

四一問、四海晏清の時如何

答、天上に星有り皆北に拱

(四四)此問
答は洛浦の
爽山に參じ
たる其の問
に用ひ而か
も一轉しな
自受用とな
したるも容
なり、從則
録第三、五
を見れば、
無限なる
心は無味
(四二)鬼子
は鐵鬼奴と
云ふが如し

す人間水東に朝せざる無し
四二問、承る、古言へる有り情
生ずれば智隔り想變ずれば躰
殊なりと只情未だ生ぜざる時
の如きは如何

問、情既に未だ生ぜず箇の什
麼をか隔つる

答、箇の屎床の鬼子未だ人
に過ぎざる在り

四三問、古人一足を垂る意旨如
何

答、龍蛇を定るの眼、虎を
擒ぶるの機

四四問、某甲遠き自り風に走
ス請ふ師一接

答、老僧會て人の爲めに殊
を述べず

問、(立つて師口を覆ふ)

答、住みね住みね且く草々
忽々なること勿れ雲月は同
じく溪山各異なり

問、(又喝す)

答、此の喝甚麼の處に落在

す

問、(又喝す)

答、天下人の舌頭を截斷す
ることは即ち無さにしもあ
らず閣梨争てか無舌の人を
して解語せしめん

問、(佇思す)

答、(便ち打)

問、(伏膺して去る)

四五問、(來つて未だ禮拜せず)
和尚這裏に在て什麼をか作す
答、庵中に在て箇の無縫塔

を造る

問、某甲も也た一箇を造らん

と要す塔様子を借取せん
答、何んを早く僧に説かさ
る人に借り去られ了る

四六問、如何か是れ和尚深々の
處

答、喫茶去

問、此れは是れ尋常の茶話

答、我れ汝が爲めに深々密
々親く説き盡す

四七問、是れ凡か是れ聖か

(四五)無縫
塔とは僧家
の裏の圓家
の形にして
なきを云ふ

集むる家ののみ
即ち師家ののみ
答らざる何此に
拘り暗誦し
廻り暗誦し
進前すべし

(八)白樂天
と鳥窠禪師
の問答なる此
に用ひたる

五問、三世の諸佛有ることを知

らず狸奴白牯却つて有ることを知ると此意作麼生

○三世の諸佛何に依つて有ることを知らざる

○狸奴白牯何に依つて有ることを知る

六問、如何なるか是れ正中偏

○如何なるか是れ偏中正

○如何なるか是れ正中來

○如何なるか是れ兼中至

て行し難き

九問、無爲無事の人猶ほ未だ金銷の難ありと未審過何れの處にか有る

○學人如何んか退步承當せん

○驢事馬事還つて是れ佛事佛行なることを知る

一〇問、眞は妄に依つて立ち妄より眞を顯すと是なりや否や

○如何なるか此れ眞

○如何なるか是れ妄

○此の二途を離れて如何んか

七問、草木國土同時成道と四十九年箇の何をか説く

○四十九年一字不説ならば五千の經卷是れ何んの文字ぞ

○釋迦老師還つて頭上に頭を安ずることなしや

八問、如何なるか是れ佛法の大意

○諸惡莫作衆善奉行と又且つ如何ん

○三才の童子何に依つて言ふこと易く八十の老翁何に依つ

圓成に合する事を得ん

一問、木佛火を渡る時作麼生

○金佛爐に投ずる時作麼生

○泥佛水を渡る時作麼生

一二問、學人劔に仗つて直に和尚の頭を切取る時作麼生

○和尚如何んか安心立命せん

○和尚還つて生死透脱の分ありや

一三問、如何なるか是れ無念の念

○如何なるか是れ無行の行

- 如何なるか是れ主中の賓
- 如何なるか是れ主中の主
- 一九問、蚯蚓切つて兩段と爲す未審佛性何の頭にか有る
- 兩頭共に動くを如何せん
- 兩頭共に有らば兩心同體か同體兩心か
- 二〇問、世尊拈華の意旨如何ん
- 迦華微笑の意如何ん
- 拈華微笑必竟餘人所不見なりや否や
- 二一問、如何なるか是れ佛

- 如何なるか是れ法
- 如何なるか是れ僧
- 師の答話を拜す
- 二三問、無心無心大無心の時作麼生
- 還つて喪身失命することなしや
- 二三問、理は事に随つて變じ、事は理を得て融ずと如何なるか是れ事
- 如何なるか是れ理
- 事理圓融の時作麼生

- 如何なるか是れ無言の言
- 如何なるか是れ無修の修
- 一四問、三世の諸佛何れの處より來る
- 三世の諸佛何れの處にか去る
- 能禮所禮性空寂
- 一五問、如何なるか是れ佛
- 如何なるか是れ道
- 何如なるか是れ道中の師
- 一六問、如何なるか是れ不昧不來の人

- 沒絃の琴聲天を動し地を動す
- 巧を弄して拙と成すこと莫れ
- 一七問、如何なるか是れ生死
- 如何なるか是れ涅槃
- 生死を離れ涅槃に住せざる時如何ん
- 和尚歸方丈行者點茶來
- 一八問、如何なるか是れ賓中の賓
- 如何なるか是れ賓中の主

問答は元來
自由自在の
機を尊ぶも
又なれども
時に應じて
時又の機に
應じて

- 二四問、如何なるか是れ須彌上の風光
- 曲椽木上に鬼眼睛を弄する
- となかれ
- 面前に立つ者は何者ぞ
- 始めて知る和尚の舌頭に針あるとを

二、特殊問話例

- 初相見の時
- (一)進問の句
- 一、某甲乍入叢林乞ふ師一接

- 二五問、二祖兩手なし甚麼に依つてか左臂を斷ず
- (坐具を提起して曰く)這個の一臂是れ兩手か是れ隻手か
- 却つて兩手の具足するを見る(と禮拜して去る)

- 二、某甲姑めて師の爐竈に入る
- 和尙乞ふ指示し玉へ
- 三、某甲乍入叢林乞ふ和尚慈訓

多用の心
少用の心
以て之る
下之る
各別る
各別る
合用る
合用る
三つも
三つも
なげたり
なげたり

其初見の時
初見の時
二問に屬せ
二問に屬せ
何處に屬せ
何處に屬せ
活勿しに得
活勿しに得
古べもばら
古べもばら
集め人の來
集め人の來
特殊の來の
特殊の來の
場ら句論得
場ら句論得

- を垂れ玉へ
- 四、遠きより風に走る乞ふ…
- 五、鈍鐵師の爐竈に入る乞ふ師
- 鉗鉗
- 六、如何なるか見れ相見の一句
- 七、如何なるか是れ和尚の家風
- 八、師の答話を乞ふ
- (一)退禮の句
- 一、尊答を謝し上る
- 二、初めて知る和尚の親切なる
- とを
- 三、他日親しく相見せん

- 四、和尚の叮嚀を謝す
- 五、師の答話を謝す
- 六、和尚の親切を謝す
- 七、老婆微愜
- 八、此語卷いて懷にし去らん

●晋山の時

- (一)進問
- 一、此山路なし、和尚何れよりか來る
- 二、如何なるか是れ入門の一句
- 三、如何なるか是れ晋山の一句
- (二)退禮

め「はたらき」多かるる
 三の例を二
 此に(活)云
 答「其問
 示す「機を
 見「参照を
 宜「多かるべ
 下「欄に
 其「印なり
 (活)一五四
 (活)二四七

- 六、鶏五葉を合んで此門に入る
- 二、一華開五葉結果自然成
- 三、吉祥々々大吉祥

●退院の時

- 一、和尚今日此山を勇退して何れの處にか去る
- 二、和尚退院正當脚跟那邊にか向ふ
- 三、和尚餞別の一句作廢生

●新年

- (一)進問
 一、如何なるか是れ新年の佛法

牛頭法融の
 故事に依る

し去る時如何

●夏

- 一、孟夏正當初一日忽ち暑雲天に催す時如何
- 二、正當七夕の一句作廢生

●秋

- 一、萬山紅葉の時作廢生
- 二、樹凋み葉落つる時如何
- 三、心月孤圓にして光萬像を含まむと、和尚見處作廢生

●冬

- 一、庭前の殘雪日輪に消す、室

(活)二四

(活)三三

(活)一五六
 (活)五六一
 及二〇一

- 二、山河觀を改むる時如何*
- 三、如何なるか是れ新年頭の一句

(二)退禮

- 一、伏して惟れば和尚起居萬福
- 二、孟春猶寒し乞ふ和尚聖胎長養

●春

- 一、靈雲桃花を見て悟道す、某甲も亦桃花を見る、甚に依つてか悟道せざる*
- 二、百鳥花を銜んで和尚を供養

内の紅塵誰をしてか拂はしめん

- 二、雪千山を覆ふ孤峰什麼に依つてか不白なる*

- 三、滴水滴凍の時如何*
- 四、如何なるか是れ年窮歲盡の一句

●降誕會の時

- 一、天上天下唯我獨尊と、意那裏にか在る*
- 二、周行七歩の意那裏にかある

●成道會の時

(活)七八

- 一、既に是れ有情非情什麼に依つてか同時に成道す*
- 二、一見明星如何が消息を通ぜん

●涅槃會の時

- 一、涅槃像は這裏にあり、釋迦何の處にかある
- 二、釋迦老子は鶴林に隠るゝも、法身常に在すと、法身常在底如何んが拈じ去らん

●入寺の時

- 一、九旬安居如何か保任に去ら

上皇の時今
上皇帝云々
と指香する
を用ふ
入寺の時一
は初相見又
は晋山をも
用するも可
なり

(活)一五二

ん

●解制の時

- 一、九旬難なく法藏周圍に至る時如何
- 二、乞ふ和尚餞別の一句子

●上堂の時

- 一、如何なるか是れ須彌壇上の風光
- 二、和尚今日香を拈じて聖壽を祝す、未審今上皇帝壽年多少ぞ
- 三、如何なるか是れ臺上の盧舎

闍提は無佛
性の者とし
て斥けらる
るものなり

三、明六通と宿命、漏盡を
命、通と云ひ
六、通と云ひ
眼、心、神、境
他、命、漏、盡
宿、命、漏、盡
の、云、ふ、名、つ
く、の、に、名、つ

(活)四二
(活)五六
(活)一二五

那身

●大般若及羅漢講式

- 一、如何なるか是れ般若の體
- 二、佛法元來不思議なしと、不審、三明六通是れ何の作用ぞ

●授戒會の時

- 一、如何なるか是れ金剛の心地戒
- 二、如何なるか是れ三世諸佛
- 三、如何にあらんか、是れ完戒

上堂の一句

- 四、懺悔の功徳能く一切の業障

を滅すと、若し闍提出頭し來らば、又且つ如何

●對靈の時

- 一、亡僧遷化して何の處にか去る*
- 二、死し去り焼き終る、心性甚の處に向つてか去る*
- 三、生死を脱得すれば去處を知る、四大分離して何れの處に向つてか去る*
- 四、某甲唯痛腸に堪へず乞ふ和尚一句を示せ

用語例は問
答の際の示
すも問ひと
答へるとな
れはとつか

口壁上に懸
るくとは黙
るとなり

三、問答用語例

問、何を早く聴かざる

答、耳目の所所に非ず

問、是れ汝が見處に非ず

答、師の證明に逢ふ

問、未在更に道へ

答、直に得たり口壁上に掛く

るとを

問、上座が見破に逢ふ

答、和尚釣り長さ三三尺

問、口開くも十萬八千

答、開かざるも十萬八千

問、阿呵々

答、直に得たり露柱點頭

問、作麼生か道へ安身立命

答、天は是れ天地は是地

問、作麼か道へ行脚の事

答、熱鐵上に寸塵を立せず

問、面前底會て藏さず

答、相見了

問、面前に立つ者は是れ何人ぞ

眼華とは、
めをまはす
と云ふ

落草とは親
切過ぎるよ
と云ふ

答、大小の和尚眼華する事莫

れ

問、是れ何者ぞ

答、和尚と同參

問、古人と今人と相去る事多少

ぞ

答、萬里長江水上の波

問、尚ほ是れ野干鳴

答、和尚の耳聾なるを奈せん

問、此中誰か是れ知音

答、露柱に非ずんば恐らくは

燈籠

問、喝

答、直に得たり三日耳聾す

問、此の飯袋子

答、請師打破せよ

問、是れ一乎是れ二乎

答、恁麼不恁麼

問、此の掠虚頭の漢

答、落草少からず

問、天地未開の時作麼生

答、身を容るゝに地無し

問、空劫已前の消息

答、烏龜火に向ふ

問、今日答話せず

答、說了也

問、好喝落處作麼生

答、湘の南潭の北

問、好喝に落處無し

答、元來々々

問、動着する事莫れ

答、青山元動せず

問、慕直去

答、大地に寸土無し

問、尙ほ是れ途中の活計

答、青山流水畫けども成らず

問、誰か是れ知音

答、虚空笑ひ點頭

問、棒頭に眼有り

答、早く瞎却了

問、作麼か道へ和尚が光明

答、蓋天蓋地

問、作麼生

答、天は是れ天地は是れ地

問、什麼と道ふぞ

答、又是れ人口を截斷す

問、笑裏に刀無し

答、早く是れ鋒を觸ふ

問、放下着

答、好し和尚の親切を謝す

問、近日何の言句か有る

答、幸に和尚の一拶に逢ふ

問、棒有り汝を打せず

答、阿刺々

問、乾坤打破の時

答、遮莫日月掌中に在り

問、山僧身を藏する所なし

答、孔明の樓上に琴を彈ずるに似たり

四、参考

(一)いろは公案看話(古人某作)

(イ)如何なるか佛と問へば乾屎橛
悪語人を傷りて恨未消せず

(ロ)廬陵の米作麼の價と人間は

前三々と後三々
(ハ)花を拈じて示す佛は五月空
暮時一番、梅雨過ぐ

(イ)乾屎橛と云ふは乾からき棒と云ふ

- (二) につこりと笑ふ迦葉の面指は
洗出す青山畫圖新なり
- (ホ) 星を見て悟る佛は何事ぞ
元來大地に衆生無し
- (へ) 隔るな菴主拳頭本と一つ
八兩元來是れ半斤
- (ト) 得々と往れて勘破す趙老は
殺活自在只時に隨ふ
- (チ) 智門作蓮花荷葉を惜まず
平生の肝膽人に向て傾く
- (リ) 陸大夫天地同根又奇怪
死中活さず可憐生

- (ヌ) 抽出て牡丹花示す南泉は
醍醐毒藥會て欠かす
- (ル) 類しても齊からずば野狐の話
よ
- (ヲ) 白鷺田に下る千點の雪
置く時は獅子は何くに雲巖の
大千沙界見るに蹤無し
- (ワ) 話を問へば三十棒と云ひなが
ら
- (カ) 迦葉尊倒刹竿は何事ぞ
醉後即當人を愁殺す

- (ヨ) 善惡しを文殊網明論するな
夜深うして同じく見る千岩
の雪
- (タ) 太隨の壞の話は如何と人問は
ど
- 萬里の長城一條の鐵
- (レ) 靈雲の桃花悟道は影形
眼中の童子目前の人
- (ソ) 作麼生が玄沙未徹の心行ぞ
獅子窟中に異獸無し
- (ツ) 月を見て笑ふ藥山何事ぞ
玲瓏八面清風を起す

- (ネ) 猫を斬る南泉老の惡棘よ
鳩酒一踏す來時の路
- (ナ) 何となく鞋を戴く趙老は
門を出て、踏まず來時の路
- (ラ) 羅山老僧伽梨收斂の勢は
金翅鳥王宇宙に當る
- (ム) 無佛性參じて見よや試に
渾身四大共紅落
- (ウ) 有佛性問ふな語るな直に知れ
一段の風光畫けども成らず
- (キ) 滄山僧牛と成るとは偽りよ
從來共に住んで名を知らず

- (ノ) 吞て見よ趙州屋裡の茶振舞
月は青天に有り水瓶に有り
- (オ) 應無所住而生其心と知る時は
十方世界に全身を現す
- (ク) 瞿曇沙彌唯我獨尊不啻
誰家の竈裡ぞ火に煙無し
- (ヤ) 燒さ了る埋む此身は遠からず
雨過ぎて一池春水深し
- (マ) 莫妄想無業の沙彌終夜
子規啼いて落つ西山月
- (タ) 華嚴靜大悟却迷何事を
先聖從來伊を識らず

- (フ) 不可得が是れ安心と知る時は
死蛇を弄して活蛇と爲す
- (コ) 胡子無鬚は如何なる面と人間
はじ
- (エ) 只箇の虚空針を掛けず
江を隔て招けば伶利者は
義を見て爲さざるは勇なま
なり
- (テ) 庭前の柏樹子見よや根も葉も
なし
- (ア) 心を垂れ示す禮拜躰もなし
心虚にして枯木龍吟を爲す

馬大師は馬
祖道一のと

- (サ) 泥牛闘うて海中に入る時
指し示す直に建たる梵刹は
觸處生涯隨分足
- (キ) 奇特の事獨坐禮拜打つ處
將軍の大平を守るを許さず
- (ユ) 夢の中彌勒に遊ぶ道づれば
盡大地の人歸去來
- (ヌ) 明眼の人や井に落つ其時は
十方虚空總に消殞
- (ニ) 見よや見よ無位の真人目前に
萬像之中獨露身
- (シ) 思惟せよ不起一念須彌山と

- (エ) 天上人間只自ら知る
惠超僧言下て悟る其時は
含元殿裏長安を見ず
- (ヒ) 非心非佛取違へたる馬大師は
黄蘗樹頭に甘味を生ず
- (モ) 物に非ず佛に非ず心に非ず
紅爐鍊出す鐵烏龜
- (セ) 青眼の諸聖已靈の棍取りは
月船を犯さず東西の岸
- (ズ) 瑞岩の喚べば答ふる主人公
馬を畫けども成らず驢又失
す

問ひて手づから教を乞ふべし初に問の前の「作者は」と云ひ、次に「御尊意」を乞ふとあり。云ふと、されど之等習俗に從ふべし強ひて已見を主とす程のなり。これに尙なり。●の次に「嘆や」とあるは、再舉の一句を再りしたるを禪●近來の禪林

時山河大地が是れ飯てさう

答、(點破)縦令恁麼なるも向上更に轉處のあるあり

二問、四海波平に龍の眠穩

答、(打込)此漢是什麼の時節ぞ

問、中々屙屎放尿動着ない乞處下の大平地てさう

答、嘆や…と云は澄潭は蒼龍の窟窟にして全機超脱の力量ないぞ

答、乞處は見よ、白浪滔天

平地に起るぞ

問、正得、滔天の波浪若し相似たれば一波一波に動相は御座ない

答、嘆や…と云ふは波々動相ないと云ふも猶是れ動不動の法を捏合する知見の痼疾だぞ

答、前句は見よ龍は潭水を離れ、鳳は蒼梧

問、正得潭水蒼梧に染着なければ諸法が無事の活計てさう

んぞ

答、乞處は見よ寰中能く主となり化外自ら來賓す

問、正得、賓主道合する時寰中化外の一人を見ず

答、縦令衆流截斷の機用を具するも君臣深密の奉重を欠くぞ

答、前句乞處は紫羅帳合して君臣隔つだぞ

問、正得君に奉じて間斷無れば上下和融の二人は御座ない

「正得」以後を云はざるを三の點破をなして止むるが如し法問の如し經典の如し近古の如し能はざるは定むるは常規なりとれは是なりと能はざるは且らるるに就いて學人參考のみに供ふるのみ、心よして讀過せよ●俗に法問を「はづす」と云ふとあり、文部に「問」の字は首座より配布す

三問、相逢無主又無賓

答、(打込)借問す是れ何の相見ぞ

問、中々何の相見か、乞處下の時節は相ひ逢ふ端的無賓主てさう

答、嘆や…と云ふはどこ迄も龍蛇混雜の消息にして賓主歴然の道あることを知ら

る法問を練
習するは、
横に力を養
ふに資あり
と人にの特
集より摘句
集より摘句
の妙唱云々
の山智偈頌
ありの偈に
あふり
智山師の富
轉句に出づ
富山を形づ
容したる句
なり
德臨と釋達
德臨と釋達
德臨と釋達
の畧稱なり

問、中々從來の妙唱は舌に干
らず

答、汝我語を會せず
問、扇子を收め申さん

一二問、八面都無三向背處一
答、(打込)一步を進め子細
に見よ

問、先調唱申さう觸せず背せ
ず行令下る向背ない首山の物
體てさう

答、嘆や...と云は拈じた
竹篋子に詠を凝したぞ

(一三)乃翁
云々は平智
禪師永平坐
の偈を覽る
乃翁と出づ
平道元禪師
を指す

てさう

答、(點破)恁麼に云とは易
く恁麼に會するとは未し

問、會不會の論了は師前に呈
唱す

答、他に靠ると勿れ
問、御茶を献じ申さう

一三問、乃翁毒手許ニ誰知
答、(打込)肯心自ら許すと
勿れ

問、中々背觸不到外人の知得
し難い毒手の行令てさう

答、不觸不背と看よ終に相
貌の人に與へて窺はしむる
無しだぞ

問、中々徹底向背なきの親處
に影も象も見え申さん

答、嘆や何處迄も向背無と
云は見猶見を存したぞ

答、終に相貌の人に與へて
窺はしむる無と見よ、釋達
德臨も見不及勘不得たぞ

問、中々好箇の地面空處の變
態と御覽せい、佛祖も覩不見

答、嘆や...と云は示衆の
此間に違背して慳收の心少
なからんぞ

答、背觸不到這裏は見よ千
劫佛の細行を具し萬劫佛の
威儀を學ぶだぞ

問、中々餘人の恐るゝ毒手を
構へたは佛祖の行持てさう

答、嘆や餘人の恐と云ふは
人を欺く大高生だぞ

答、千劫佛の細行を具し萬
劫佛の威儀を學ぶと見よ善

(二四) 無端
云々は大智
禪師の無情
說法の傳
に出づる
なり

(一四) 説似
一物即中
とは一つ
もあつて
まどくは
かんだの
意

坐前七尺
單前七尺
坐前七尺
來く坐前
なり

知識の念に住し相互に慈愛
し自他を顧憐したる

問、正得毒手に骨無妙術と御
覽ぜい自他を憐む方便てさう

答、(點破)方便なしとはい
はず語に依つて解を生ずる
に似たり

問、語に依らず誰か肯て祇對
せん

答、能く護持せよ

一四問、無端打破常住境

答、(打込)我に破片を返し
來れ

問、中々拗截して是れ甚麼と
常住物打破の時節てさう

答、嘆や...と云は穩々地
に此物を珍重したる

答、拗截して是甚麼ぞと楷
下に擲向したと見よ説似一

問、中々打破境に妙相なけれ
ば似たる様子は御座ない

答、嘆や様子無いと曰も一

物珍重靈にして衲僧一代の
重荷だぞ

答、説似一物即不中と見よ
曠大劫來空索之だぞ

問、試に打破して御覽ぜい元
來手だまりない空索之てさう

答、(破點)縱令恁麼に言ふ
も七尺單前に向つて如何と
見よ

問、他日再び祇對せん

答、能く護持せよ

一五問、何んが向佛邊一得二逗

留
答、(打込)恁麼の見處那裡
より得來る

問、先調唱申さう、其麼と見
ると拗截したは佛邊に跡せぬ

禪子の見處てせう

答、嘆や...と曰ふは諸聖
解脱の見處にして我心少

らんぞ

答、拗截當頭の這裏は見よ
佛事門中不捨一法だぞ

問、正得佛邊に染ぬ那底は擧

相(五)住世間
法華經の文は
なり
答(六)は世尊の
華は世尊の
華は世尊の
處は世尊の
笑は世尊の
也

手動足不捨の一法てさう

答、嘆や佛邊に染ぬと日は

法位に背く高々我慢だぞ

答、佛事門中不捨一法と見

よ法住法位にして世間相常

住だぞ

問、中々常住不變の法位に在

つて纒も染着は御座ない

答、(點破)不染著はなきに

しもあらず、恐くは片見な

らん

問、那一見は和尚に呈露す

答、他日此話を唱和せん

問、歸寮申さう

一六問、眼睛鼻孔不貪染

答、(打込)這漢病眼顛倒す

ると勿れ

問、中々貪染なき鼻目其儘拈

花微笑の直指てさう

答、嘆や...と云は善惡城

の窟宅を免れんぞ

答、拈華微笑と見よ六根の

門戸を閉却したぞ

問、正得閉却其儘取りも直

公案云々現成
公案云々現成
公案云々現成
公案云々現成
公案云々現成
公案云々現成
公案云々現成
公案云々現成

さぬ娘生の本面皮てさう

答、嘆や娘生の本面皮と云

は凡骨を勞する心頭の繫縛

だぞ

答、六根の門戸を閉却した

と見よ從來形名無く天真生

相を忘じたぞ

問、中々諸相非相即見無染汚

の變體てさう、

答、(點破)此の影象を把握

するの漢何の限か有ん

問、履跡を勞すると勿れ

答、後生を瞞すると無くん

ば好し

問、御茶を献じ申さう

一七問、現成公案沒商量

答、(打込)別傳の作者有る

とを知るべし

問、別傳と知つた拈花微笑は

自心の現成にして四の五の八

百商量に及ばず

答、嘆や...と日は思量無

きに似て却て公案を弄する

現成有爲の活作計だぞ

(一七) 蘊界
とは五略十
八界の略十
即ち一切世
間の物柄と
云ふ義なり

(一八) 樂苦
云々は即佛
の即心即佛
の偈に出づ

(一九) 擔板
漢とは板を
方かいて見
ぬ方かいて見

答、拈花微笑の正當は千七百の公案泥土に埋却したぞ
問、中々埋めた泥中見さめな
い現成公案にして商量す可きは御座ない

答、嘆や商量す可き無いと云は自身の所現にして目前の貪愛だぞ

答、千七百の公案泥土に埋却したと見よ目前の事に非ず耳目の所現に涉らんとぞ
問、正得其境に有つて其境

答、嘆や...と曰は、談中の味を正得した舌頭の法だぞ

答、拈花微笑の這裏は見よ耳辛苦澁舌に不干ぞ

問、中々無舌人の證據にして只有りの儘別味は御座ない

答、嘆や別味ないと曰ふは心意識の轉倒にして慮知閑知だぞ

答、耳辛苦澁舌に不干と見よ八識田中を掃ひ倒したぞ

に墮せぬ公儀案札てさう

答、(點破) 例令恁麼なるも諸縁蘊界を離て始て得べし

問、離れ切た餘りてさう

答、油断せば不可ならん

問、叮嚀は君徳を損ず

答、能く護持せよ

一八問、樂苦氷寒不覆藏

答、(打込) 定見に墮すると勿れ

問、中々寒苦分明毫も藏さぬ拈華微笑の左右てさう

問、正得掃識袋中纒も味さぬ悟人の日用てさう

答、(點破) 縱令恁麼なるも重ねて迷悟を論ずると勿れ

問、穿鑿少からず

一九問、汝如是我又如是

答、(打込) 這擔板漢機用を缺くと勿れ

問、中々拈花微笑我汝と各自知音の出逢てさう

答、嘆や...と曰は我見人見衆生見と吾我の封疆を守

云々は千年
禪師の眞智
和尚の語を
看る偈に出

つたぞ

答、拈花微笑の正當は我に

我無く汝に汝無いぞ

問、正得我と汝と罣碍無罣碍

無心無事の影子でさう

答、唳や影子を留たは影を

留めて象を弄した事よ我に

我無く汝に汝無さと看よ通

身無影象だぞ

問、正得無影象の影象當處に

出生し隨處に滅盡せり

答、(點破)縱令恁麼に言ふ

も百雜碎とつかれては何と

問、破片を弄すると勿れ

二〇問、千年古曲無三人調

答、(打込)近前して如何と

見よ

問、中々拈花微笑の消息は餘

人の調に落ちぬ無閑談の秘曲

でさう

答、唳や...と曰ふは琴中

の趣を知ると雖も素人に親

き調あるとを知らんぞ

答、拈花微笑の正當は調入

梅花に聞くに忍んぞ

問、正得聞くに忍ぬ曲調こそ

他の解し難い妙手絃琴の古曲

てさう

答、唳や解し難いと曰は外

に立つ管絃にして這裡入得

の分ないぞ

答、調梅花に入つて聞くに

忍びんと見よ一切衆生悉有

曲調にして會する則は同一

花だぞ

問、正得同一眼見の曲調我に

有り我も全く知らず

答、(點破)不知最も親切重

て親處に行くと勿れ

問、若し此語無んば吾殆んど

錯らん

答、更に參ぜよ三十年

問、觸禮三拜

●附言

或は扇子商量を引續きなすとあ

り、其問答の體は此等の語を味

ひて自由に用ひ得べし、今は更

に説かず

三〇觸禮
式の部に
だせり、
坐せり、
とに禮を
るに禮を
云ふす

と垂詩師々(六)居何僧向とは(六)居山好
とあり手ににのをは(六)居時と家に一雲居山好
入は出寄大回にとる一問畢一僧竟僧和
鄭廻づ人智途出答に山ひ竟僧和
時原の禪云づへ好にた如が

五問

答、信不及なると勿れ
答、華有り月有り樓臺有り
答、(打込)面前の境に墮す
ると勿れ
答、嘆や…今時の風光に
膽魂を奪はれたとよ
答、請處は見よ華は南山の
麓に散り、月は北海の潮に
沈む
答、大地黒漫々の時作麼生
答、果然正中偏あることを
知らず

六問、居山好

答、花有り月有り誰れか此
中の主人公
答、(打込)也太奇那人の行
履ぞ
答、嘆や…雲居屋裡の日
用ぞ
答、請處は見よ回途手を垂
れて廊に入る
答、入店垂手の事あることを
知らず
答、前山も雪漫々後山も雪

(八)閉門打
睡は從容錄
の垂示に出
づ
八(八)番生は
又はシユク
とありと云ふ

七問、水牯牛

漫々
答、四維上下南北東西
答、舌頭骨無し
答、(打込)固く鼻繩を把り
來れ
答、嘆や…風流獨り愛し
て色光を染汚す
答、牛を桃林の野に放ち馬
を華山の陽に放つ
答、縦令恁麼なるも這箇の
竹篋で一鞭打たれては何ん

八問、一句人の爲めに説かず

と
答、叱々箇の畜生
答、吞盡す靈山一會の人
答、(打込)奇怪なり什麼か
恁麼なる
答、嘆や…閉門打睡の佛
向上にして拔苦與樂の誓願
を缺く
答、乞處は見よ説々衆生説
三世一切説
答、即今何人か上座の口を

八、魚行
て云々は行
の著録に二
著録に二は
光誨禪師は
僧が達磨は
問ひたりと
案をひたり
淳禪師の霞
でたりるに
出頌子

啞却す
答、道はずく
答、魚行て水濁り鳥飛て毛
を落す

九問、大唐國裏禪師なし

答、(打込)自己の見解に誇
ると勿れ
答、嘆や... 佛法元來多子
無しと徹見して無の見に落
在す
答、請處は見よ智識南方五
十三

(一)世尊
拈出云々は
大智禪師拈
華の語に出

(二)干戈
云は大智佛
誕生の偈に
出づる遠く
は普燈録に
も出てたり

答、其地を轉じ來れ老兄と
相見せん
答、長連床上脚を展べて
臥す夢中會て説く悟圓通、
作家會て共に來端を辨す

二問、世尊拈出す一技華

答、(打込)二千年己前の事
試に道破せよ見ん
答、嘆や... 靈山昔日の閑
伎倆にして迦葉の破顔を待
つたよ
答、請處は見よ持せざるを

答、這裡己に無禪師何人に
か參見せん

答、聖を越え凡を越え百草
頭上に涅槃妙心を拈出す

一〇問、長年獨坐す寒巖草

答、滿口に霜を含む
答、(打込)機位を守ると勿
れ
答、嘆や... 一色光中の
すくみ足
答、請處は見よ白雲に坐着
するも亦妙ならず

捨て覺せざるを忘す

答、與麼ならば一技を呈露
せよ見ん

答、更に一技有り老兄却て
知るや

答、遲了八刻我に話頭を還
し來れ

答、什麼と道ふぞ

答、果然

二問、干戈を動せず

答、(打込)精粉を著けて始
て得可し

(一四)大智
の偈の富士
山を詠じた
所に出づ

答、嘆や……無事を是とし
て參覺莽鹵にし去る
答、請處は見よ百戦功成つ
て太平に逢ふ
答、與麼ならば其氣を盡し
來れ
答、赤旛の下に清風を起す
人天此より空生を見る
答、曾て禪家に與へて戦争
を作さしむ

一三問、富士山高し東海の天
答、(打込)打破了也

答、嘆や……眼に一物を珍
重して西行法師の物の遊に
詠めをこらしたことよ
答、分破す華山の千萬里
答、天地未開の時如何
答、南北東西歸去來夜深く
して同く千岩に著く
答、乾坤を吞却し了るや
一四問、巍然として獨露す白雲
の問
答、(打込)眼屑を拭うて如
何と見よ

答、嘆や……燈下に圓影を
見る
答、請處は見よ諸佛世界坦
然平等
答、與麼ならば乾坤打破の
時作麼生
答、遅や
答、秋夜の猿は葱嶺の月に
啼き春晨の鶴は鷲峰の烟を
吐く
一五問、脚眼下大光明を放つ
答、(打込)是何人の境界ぞ

答、嘆や……圓滿報身の露
現にして佛祖位中の小賣弄
答、請處は見よ此土西天佛
祖無し
答、光影裏を出頭して始め
て得べし
答、回光返照
答、妙に通明一點の秋を作
すぞ
一六問、三界唯一心
答、(打込)其の心を呈露し
來れ

(一八) 洞然
明白は一信
心銘に
唯莫僧愛
あり
無しの意は
大集經に出
たり

(一九) 燕石
とは燕の巢

塊の中に
似たる玉に
ふたるを云

(二〇) 箇の
云々は前に
出づ
(二一) 聖諦
第一義の字
帝の談に出
たり
(二二) 放光
動地云々は
大智禪師に
成道の偈に
出たり

答、嘆や… 奴を留めて郎

と作すの痴漢

答、三界法なく亦心なし

答、這箇心外に有るか心内

に有るか

一七問、元來大地に衆生無し

答、(打込)別向上の一路有

ることを知れ

答、嘆や… 空見外道の見

解たぞ

答、請處は見よ放光動地群

生を度す

答、何に因てか這箇を餘し

得たる

一八問、洞然明白

答、錯て會すると勿れ

答、嘆や… 未得謂得増上

慢の漢

答、重々の金鎖是れ疑情

答、試に、明自裡に出頭し

來れ

一九問、玉盤に走る

答、(打込)放下着

答、嘆や… 燕石を留めて

交渉

二二問、聖諦第一義

答、(打込)寐語すると勿れ

答、嘆や… 万劫の緊蹙撮

を留めて本分の一義と錯つ

たとよ

答、廓然無聖

答、作麼生か道へ本分の第

一義

二三問、放光動地群生を度す

答、這の漢造作に渉ること

勿れ

(二三)一切衆生云々は七卷及び第七卷に出づ

(二三)扶律談常とは涅槃經ののを涅槃家のの解説をなしたる名稱なり

(二四)歴劫云々大智禪師佛成道の獨に出づ

(二五)飯に飽いて云々大智禪師の無屬接待の偶に出づ

(二五)一日作云々は百丈禪師の部の出てたり

答、嘆や……人家の男女を魔魅する漢

答、請處は見よ祖佛從來人の爲にせず

答、何としてか竹篋子を餘し得たる

二三問、一切衆生悉有佛性

答、此漢、誤つて會すると勿れ

答、嘆や……扶律談常の説話を是としたとよ

答、請處は見よ法身覺了す

れば無一物

答、與麼ならば佛性あるが是か

二四問、歴劫操持して法身を成ず

答、精魂を弄すると勿れ

答、嘆や……海に入つて砂を算へて徒に自ら勞す

答、請處は見よ一超直入如来地

答、與麼ならば歴劫操持は何んと

二五問、飽飯鼻齟々

答、(打込)慚愧を知れ

答、嘆や……睡眠の因縁を以て一生空しく過した漢

答、請處は見よ一日作さざれば一日食はず

答、吾が爲に、飯錢を返し來れ

二六問、直心是道場

答、維摩言下に落在すると勿れ

答、嘆や……精細の參學な

答、請處は見よ一翳眼に在りて空花亂墜

答、作麼生か、是れ眞箇の道場

第六、法問及問答用語例

一、拈竹篋

箇の竹篋子短に任せ長に任せて

るとを山高くして豈に白雲の

飛ぶを礙えんや

○紅爐に入らずんば争か眞金を

辨ぜん

○若し高樓に登らずんば争か滄

海の寛きとを知らん

○向上の鉗鎚を明んと要せば須

らく是れ作家の爐鞴たるべし

○行き盡くす江南の數十程曉風

残月華清に入る

○百尺の竿頭更に一步を進めん

○竹中の一滴曹溪の水漲も起す

江西の十八灘

○十万里程幾峯をか渉る沙中に

舌を彈して降龍に授く五天到

らん日應に頭白なるべし月は

落つ長安半夜の鐘

○未だ到らず尙ほ驚く山嶮峻

脅て到る正に知る路行程

○機を回し踏著す通霄の路何所

の青山是れ家にあらざる

四、贊嘆語

○多年劍客を尋ねて今日作家に

逢ふ

(四)雪後
々々
虚堂
録に
出て
たり

○江波を釣り盡て金鱗始て逢ふ

○我從來簡淡を疑着す

○雪後始めて知る松柏の操事

難うして方に見る丈夫の心

○衆客多しと雖も一麟飛く

五、無義味の語

○八角の磨盤空裏に走る

○崑崙生鐵を嚼む

○椀子地に落ちて椀子七八片と

成る

六、呵罵を受けざる語

○相罵るとは備に饒す、背を接

け相唾するとは備に饒す水を

潑げ

○只滔天の水あつて曾つて順水

の浪なし

七、呵罵の語

○飛龍馬を勅點すれば跛龍出頭

し来る

○事を聴いて眞ならざれば鐘を

喚んで甕と作す

○泥團を弄する漢甚麼の限りか

有らん

○亦た是れ草裏の漢

活用語例の問答は、前にあり、活用の法を示したるもの

- 凛々たる孤風自ら誇らず寰海に端居して龍蛇を定む
- 絲を千尺に垂て凡鱗を釣らず
- 會する則は途中受用會せざる則は高別手差
- 我奴は識らず錦囊の重きとを青山の暮色を裏得て歸る
- 妙明の一句威音の外折角の泥牛雪裏に眠る

九、活用語例

問、知音は更に青山の外
答、今日幸に好知音に逢ふ

- 問、是同乎是別乎
答、兩頭を離れて師の一接を乞ふ
- 問、好個の衲僧
答、舌頭は甘く舌根は苦し
- 問、低聲々々
答、與麼ならば歸方丈
- 問、賊、賊を知る
答、和尚低聲
- 問、自己を返照し來れ
答、適來侍者下に呈す
- 問、門に入る時先づ類を見よ

- 果然看、看、儼が把不住
- 果然として摸索不着
- 錯て定盤星を認むると莫れ
- 葛藤窟裡自ら出頭し來れ
- 喝、斯の野狐精
- 頭上大高生末後大低生
- 鯨鯢を釣に慣れて巨浸を澄しむ却て嗟す蛙歩の泥を沙に蹶するを
- 青龍を駕與すれども騎るとを解せず
- 棺木裏の瞠眼子

- 言は飛龍の前に在り行は跛躄の後へに隨ふ
- 八、作用語
- 少林の一語は舌頭に上らす
- 醍醐の毒藥一時に行ず
- 權柄手に在り殺活時に臨む
- 燈籠を拈して佛殿裏に向ひ山門を將て燈籠上に來る
- 官には針を容れず私には車馬を通ず
- 要津を坐斷して凡聖を通ぜざるも未だ分外とせず

大師なり、
風恙とは病、
氣の時罪あり、
當の細る病、
者として傳、
氣とされたる、
も説きたる

士良久して云く、罪を覓むるに
不可得、祖云く汝が與めに罪を
懺し竟る、宜しく佛法僧に依り
て住すべし、士云く今和尚に見
えて已に是れ僧なることを知る、
不審、何をか佛法と名く、祖云
く是心是佛是心是法、法佛無二
僧寶も亦然なり、士云く今日始
めて罪性の、内にも在らず外に
も在らず中間にも在らざることを
知る、其心の如んば、然も佛法
無二なり、祖深く之を器とす即

爲に剃髮して云く、是れ吾が資
なり、宜しく僧と名くべしと、
執持すると二載、乃ち達磨の信
衣正法眼藏を付して偈を説いて
密に囑す護持して斷絶せしむる
無れと。

八、六祖風幡

六祖大師因に風刺幡を闕ぐ、二
僧あり對論す一僧曰く幡動く、
一僧曰く風動く、往復して會て
未だ理に契はず、祖曰く是れ風
動くにあらず是れ幡動くにあら

祖が五祖よ六
祖が衣鉢を受
けたることを
明かす知りて
雲柄一問が
追ひか問答
なる時のか答

(九)密はの
はの字はの
調む

ず、仁者の心動くなり、二僧
悚然たり。

九、六祖衣鉢

六祖因に明上座、越つて大庾
嶺に至る、祖、明の至るを見て即
ち衣鉢を石上に擲つて云く、此
衣は信を表はす、力を以て争ふ
可けん耶、君の將り去るに任す、
明遂に之を擧ぐるに山の如くに
して動かす、脚蹶悚慄す、明云
く我れ來て法を求む衣の爲にあ
らざるなり、願くは行者開示し

給へ、祖云く不思議不思議、正
與廢時那箇か是明上座父母未
生已前本來の面目、明當下に大
悟し、遍體汗流る、泣涙作禮し
て問うて云く、上來の密語密意
の外、遠つて更に意旨ありや否
や、祖曰く我れ今汝が爲に説く
者は即ち密にあらずる也、汝若
し自己の面目を返照せば密は却
て汝が邊に在らん、明云く某甲
黄梅に在つて衆に隨ふと雖も實
に未だ自己の面目を省せず、今

○清原
は、多
原、思
る、兩
斯、記
州、山
青、原
に、あ
り、吉

○嵩山
安、國
嵩、嶽
師、の
墮、の
師、の
乃、破
乃、籠

○馬祖
一、禪
禪、師
師、の
乃、祖
乃、道

入處を指授するを蒙つて人の
水を飲んで冷暖自知するが如
し、今行者は即ち是れ某甲が師
也、祖曰く汝若し是の如くなら
ば則ち我れ汝と同じく黄梅を師
とせん、善く自から護持せよ。

一〇、清原盧陵の米
清原の思禪師に僧問ふ、如何が
是れ佛法の大意、師云く、盧陵
の米作麼の價ぞ。

一一、南嶽說似一物即
不中

六祖因に南嶽の讓和尚に問うて
曰く、甚の處より來る、讓曰く
嵩山安國師の處より來る、祖曰
く恁麼に來る物は是れ誰ぞ、讓
八年を経て方に下語して曰く、
說似一物即不中、祖曰く還つて
修證を假るや否や、讓曰く修證
は則ち無きにあらず染汚は則ち
得ずと。

一二、南岳磨磚
洪洲江西の馬祖大寂禪師南岳に
參侍し、密に心印を受く、蓋し

○作佛
を、の
を、の
は、サ
ト、讀
む、べ

○磨磚
は、瓦
なり

同參を抜いて傳心法院に住す、
常日坐禪す、讓是れ法器なりと
知つて、師の處に往いて問うて
曰く、大德坐禪して箇の什麼を
か圖る、師曰く作佛を圖る、讓
即ち一磚を取つて師の菴前の石
上に於て磨す、師遂に問ふ、什
麼をか作す、讓曰く磨して鏡と
なさん、師曰く磚を磨して豈に
鏡となすとを得んや、讓曰く坐
禪豈に作佛を得んや、師曰く如
何せば、即ち是ならん、讓曰く

人の車に駕するが如し、車若し
行かざれば車を打たんか即ち
是、牛を打たんか即ち是、師無
對、讓亦示して曰く、汝坐禪を
學ぶとを爲すか、坐佛を學ぶと
を爲すか、若し坐禪を學ばば佛
は坐臥にあらず、若し坐佛を學
ばば佛は定相にあらず、無住の
法に於て取捨すべからず、汝若
し坐佛せば、即ち是れ佛を殺す、
若し坐相を取らば其理に達する
にあらず、師示誨を聞いて醍醐

(一三)西江
とは今の廣
西省より發
し廣東に
入る大河に
て又は大江
と云ふ

(一四)婆子
の年代不明
なれども、
其機鋒を
見るに、
るに、
の、
居れば、
置けり

を飲むが如し。

一三、龐蘊居士

龐蘊居士馬祖に問ふ、万法と侶
爲らざる者は甚麼人ぞ、祖云く
汝が口は西江の水を吸盡し來
ることを待つて即ち汝に向つて道
はん、士言下に省悟有り。

一四、婆子燒菴

昔婆子あり、一菴主を供養す、
二十年を経るに常に一の二入の
女子をして飯を送つて給侍せし
む、一日女をして抱定せしめて

曰く、正與糜の時如何、主曰く
枯木寒巖に倚る、三冬暖氣無し、
女子歸つて婆に舉似す、婆曰く
我二十年祇箇の俗漢を供養し得
たりと、遂に遣出して、菴を燒却
す。

一五、憲宗問光(韓退之)

唐の憲宗帝、佛骨の舍利を迎へ
内に入れて供養す、夜光明を放
つ、早朝群臣に宣問す、皆な陛
下の聖德聖威を賀す、唯韓愈賀

(一五)此事
は佛祖統記
にも出でて
之は、
潮州にて後
之より、
法頭師にて
るなり

(一六)百丈
和尚の徳海
木作の一日
不作の一日

せず、上宣問す、群臣皆を賀す、
卿何を獨り賀せざる、愈奏して
白く、臣會て佛書を見るに、佛
光は青黃赤白等の相にあら
ず、此は是れ龍神衛護の光なり、
帝問ふ如何が是れ佛光、愈對無
し、此に因て罪して潮州に謫せ
らる。

一六、百丈獨座大雄峰

百丈の海禪師に僧問ふ、如何
が是奇特の事、師云く獨坐大雄
峰、僧禮拜す、師即打す。

一七、百丈不食

百丈曰く一日作さざれば一日
食はず。

一八、百丈野狐

百丈山大智禪師凡そ參の次で、
一老人有り、常に衆に隨つて法
を聴く、衆退けば老人も亦退く、
忽ち一日退かず、師遂に問ふ、
面前に立つ者は復た是れ何人
ぞ、老人曰く某甲は非人なり、
過去迦葉佛の時に於て、會て此
山に住す、因に學人問ふ、大修

食には多少の異説あり、故に此句の事蹟を尋す

行底の人還つて因果に落るや也
た無や、某甲他に答へて云ふ、
不落因果と、後、五百生野狐身
に墮す、今請ふ和尚一轉語を代
つて、貴くは野狐身を脱せん、
遂に問ふ、大修行底の人還つて
因果に落るや也た無や、師曰く
不昧因果と、老人言下に於て大
悟作禮して曰く、某甲已に野狐
身を脱して遂に山後に住らせ
ん、敢て和尚に告ぐ、乞ふ亡僧
の事例に依れ、師維那をして白

槌して衆に告げて曰はしむ、食
後に亡僧を送らんと、大衆言議
すらく一衆皆安し涅槃堂又病人
なし、何故ぞ此の如くなる、食
後只師の衆を領して山後の巖下
に至つて、拄杖を以て一の死野
狐を指出して乃ち法に依つて火
葬するを見る、師晩に至りて上
堂、前の因縁を擧す、黄檗即ち
問ふ、古人錯つて一轉語を祇對
して五百生野狐身に墮す、轉を
錯らずんば、箇の什麼とか作さ

(一九)靈照女は龐居士の女にして、賢女と知られたる人なり、日本、野洞、雲に「靈照女圖」あり、(二九)丹霞天然は禪師のとなり

ん、師曰く近前し來れ、儼が爲
めに道はん、藥遂に近前して師
に一掌を與ふ、師手を拍つて笑
つて曰く將に謂へり胡鬚赤と、
更に赤鬚胡有り。

一九、丹霞問靈照女

丹霞の然禪師、龐居士を訪ふ、
門前に女子靈照去つて菜を洗ふ
を見て、師問ふ、居士在りや不
や、照菜籃を放下して手を歛め
て立つ、師又問ふ、居士在りや
不や、照、籃を提起して去る、師

便ち回る、居士外より歸る、靈
照居士に舉似す、士云く丹霞在
りや否や、照云く已に去れり、
居士云く赤土牛欄に塗る。

二〇、丹霞燒木佛

丹霞の然禪師嘗て洛京の惠林寺
に到り、天寒に値ふ、遂に殿中
に於て木佛を取つて燒いて火に
向ふ、院主偶見て呵責して曰
く何ぞ我が木佛を燒くことを得
る、師杖を以て灰を撥いて云く
吾燒いて舍利を取る、主曰く木

(二二) 麻谷
は實徹禪師
資なり

佛安を舍利有らん師曰く既に舍利無じ、更に請ふ兩尊を再取して之れを焼かん、院主自から眉鬚墮落す。

二二、樂天問法

白居易鳥窠和尚に問ふ、禪師の坐處甚だ危険なり、窠曰く老僧甚の危険か有る、侍郎が危険尤も甚し、曰く弟子江山を位鎮す、何の險なるとか之有ん、窠曰く薪火相交はり識性停らず、險は非ざることを得んや、又問ふ、

(二三) 藥山
推石礮師は
石頭無際也

を去卻して而して坐す、雲曰く死中に活を得るは萬中一もなし、谷床を下つて坐具を抽く勢を作す、雲近前把住して曰く前死後活、儼還て甘ふや否や、谷曰く甘ふは即ち甘ふ、阿師什麼を作すにか堪へん、雲推開して曰く道ふとを知んぬ、儼前言後語に副はず。

二三、藥山不爲底

藥山の儼禪師初め石頭和尚に參す、一日坐する次て、頭問ふ甚

如何なるか是佛法の大意窠曰く諸惡莫作衆善奉行、曰く三才の孩子も也恁麼に道ふとを解す、窠曰く三才の孩子も道ひ得ると雖も八十の老人も行ずるとを得ず、白遂に作禮して去る。

二二、麻谷手巾

麻谷一日紙帳の内にして坐す、手巾を以て頭を蓋ふ、披雲、入つて見て便ち哭聲を作す、良久して法堂に入り去る、禪床を繞ると一匝して再び來る、谷手巾

麼をか作す、師云く一物も爲さず頭云く恁麼ならば即ち閑坐するや、師云く若し閑坐ならば即爲せり、頭云く汝道へ爲さざる箇の甚麼をか爲す、師云く手聖も亦不識、頭乃ち頰を作りて讚して云く「偈」從來共に住して名を知らず任運に相將ゐて只麼に行く、古より上賢だも猶不識、造次の凡流豈明む可けんや。

二四、陸亘笑哭

陸亘大夫南泉に參す、泉遷化す、

巨は史大夫と
史字は景山
大夫は景山

巨、喪を聞き寺に入つて下祭す、却て呵々大笑す、院主曰く先師大夫と師資の義有り何ぞ哭せざる、大夫曰く道ひ得ば即ち哭せん、院主無語、巨大に哭して云く蒼天蒼天、先師世を去ると遠し、後來長慶聞いて曰く大夫笑ふべし哭す可らず。

二五、南泉三世諸佛

僧南泉に問うて曰く、三世の諸佛、有ることを知らず狸奴白牯却つて有るよを知る、甚麼と爲

てか三世諸佛有ることを知らざる、泉云く未だ鹿苑に入らざる時、猶ほ些子に較れり、僧曰く狸奴白牯甚麼と爲てか却つて有るよを知る、泉曰く汝争か伊を怪み得ん。

二六、南泉鎌子

南泉、山に在つて作務する次で僧問ふ南泉の路何處に向つてか去ると、泉鎌子を拈起して曰く、我者茅鎌子三十錢に買ひ得たり、僧曰く茅鎌子を問はず、南

(二七)大梅
法常禪師の
法嗣なり

泉の路何處に向つて去る、泉曰く我使ひ得て甚だ快なり。

二七、大梅梅子

龐居士因に大梅の常和尚に問ふ、久しく大梅と聞く、未審、梅子熟すや未しや、師曰く何處にか箸を著す、居士云く百雜碎、師手を展べて云く我に核子を還し來れ、居士無語。

二八、黄檗三日耳聾

黄檗の運禪師一日百丈を辭して云く、馬祖を禮拜し去らんと欲

す、丈云く馬祖己に遷化せり、師云く、未審、馬祖に甚の奇特の言句か有る、乞ふ師吝まされ丈遂に再び馬祖に參ぜし因縁を舉して乃ち云く、我當時大師に一喝せられて直に三日耳聾することを得たり、師覺えず頭を縮めて舌を吐く、丈云く子已後に馬祖に承嗣すること莫しや、師云く、然らず、今和尚に因つて馬祖の大機大用を見ることを得たり、要且つ馬祖を識らず、若

(二八)黄檗
希運禪師な

(二八)見師
と齊うして
師の半徳を
減ずの一句
後進の者の
共に仰ぐべ
き所なり
見とは見識
の也

し馬祖に承嗣せば恐くは我兒孫
を喪せん、丈云く見師と齊さは
師の半徳を減ず見師に過ぎて方
に傳授するに堪へたり、子甚だ
超師の見あり。

二九、瀉山水牯牛

瀉山祐禪師衆に示して曰く、老
僧百年後山下の檀越の家に向つ
て一頭の水牯牛と作つて左脇下
に於て五字を書して曰く、瀉山
僧某申と、此時若し喚んで瀉山
僧と作さば、又是れ水牯牛、喚

んで水牯牛と作さば、又た瀉山
僧某申と云ふ、且く道へ、喚ん
て甚麼と作さば即ち得てん、仰
山出てて禮拜して而して去る。

三〇、瀉山摘茶

瀉山仰山と茶を摘む次て瀉曰く
終日只子の聲を聞いて子が形を
見ず、仰遂に茶樹を撼す、瀉曰
く子只其の用を得て、其體を得
ず、仰曰く和尚只だ其體を得て
其用を得ず、瀉曰く子に三十棒
を放す。

(三一)抽は
メキソツと
訓む

(三二)香嚴
寺智閑禪師
ば瀉山法嗣
なり

三一、靈雲見桃花

福州靈雲の志勸禪師、因に桃花
を見て悟道し頌有り、云く三十
年來尋ニ劍客ニ幾回葉落又抽ニ枝
自ニ從ニ見桃花ニ後直至ニ如今ニ
更不レ疑ト、後ちに瀉山に舉似
す、山曰く縁より入る者は永く
退失せず、汝善く護持せよ、玄
沙聞いて曰く諦當なるとは甚だ
諦當、敢保す、老兄の猶未徹在
なるとを、雲門曰く甚の徹不徹
とか説かん、更に參ぜよ三十年

三二、香嚴擊竹

香嚴知閑禪師、一日艸木を芟除
す、因に瓦礫を以て竹を撃つて
聲を作し、廓然として省悟す、
乃ち頌を述べて曰く「一擊忘
所知、更不レ假ニ修治。動容揚ニ古
路ニ不レ墮ニ悄然機ニ處々無ニ踪跡。
聲色忘ニ威儀、諸方達道者、咸言

三三三龍潭
崇信と云
天皇道悟
の嗣は朗
徳山宣鑑
州徳山と
禪師龍潭
信禪師の
嗣と成通
唐成通六
十六歳に
化せり

『上上機』

三三、徳山焼疏

龍潭の信禪師因に徳山と侍立して夜に抵る、師曰く更深し、子何ぞ下り去らざる、山遂に珍重して籠を掲げて而して出て、外面の黒さを見て却回して云く、門外黒し、師乃ち紙燭を點じて山に度與す、山接せんと擬す、師便ち吹滅す、山當下に大悟作禮す、師曰く箇の甚麼の道理を見見る、山云く某甲、今日より

ち焼却し禮辭して而して去る。

三四、徳山行棒

徳山小窓に曰く老僧今夜答話せじ、問話の者あらば三十棒と、時に僧有り出て、禮拜す、山便ち打つ、僧曰く某甲未だ問話せざると在り、什麼と爲てか打つ、山曰く爾は是れ何處の人ぞ、僧云く新羅の人、山曰く未だ船舷に跨らず、好し三十棒を與ふるにと、僧此に於て省有り。

三五、臨濟の四喝

去つて天下の老和尚の舌頭を疑はじ、師明日に至つて上堂、衆に告げて曰く可の中箇漢あり、牙劍樹の如く、口血盆に似たり、一捧に打てども頭を回らさず、佗の時孤峯頂上に向つて吾が道を立て去ると在り、山遂に平日の疏鈔を取つて法堂前に於て提起して曰く、諸の立辨を窮め、一毫を大虚に致すが如く、世の樞機を竭し一滴を巨壑に投ずるに似ると云ひて、疏鈔を持て便

臨濟僧に問ふ、有時の一喝は金剛王寶劍の如く、有時の一喝は踞地金毛の獅子の如く、有時の一喝は探竿影草の如く、有時の一喝は一喝の用を作さず、汝、作麼生か會す、僧疑議す、師便ち喝す。

三六、臨濟の四境

僧臨濟に問ふ如何なるか是れ四種無相の境、師曰く爾が一念心の疑、地に來つて礙へらる、爾が一念心の愛、水に來つて溺さ

三四問話
は「モンナ」
と讀む、

三五臨濟
は鎮州臨濟
院慧照禪師
のとなり

(三七)嘘の
聲とはフト
イ聲と云ふ
となり

る、備が二念心の噴、火に來つ
て焼かる、備が一念心の喜、風
に來つて飄さる、若し能く是の
如く辨得せば、境に轉ぜられず、
東涌西没、南涌北没、中涌邊没、
邊涌中没、水を履むと地の如く、
地を履むと水の如し、何に縁つ
てか此の如くなる、四大如夢如
幻に達するが爲の故なり。

三七、臨濟栽松

臨濟松を栽うる次で、黃檗問ふ、
深山裏に許多の松を栽ゑて、什

麼か作ん、師曰く一には山門の
與に境致となし、二には後人の
與に標榜と作んと道ひ了つて鏝
頭を以て地を打つと三下す、黃
檗曰く然も是の如くなると雖も
予已に吾が三十棒を喫し了れ
り、師又鏝頭を以て地を打つと
三下、嘘々の聲を作す、黃檗曰
く吾が宗汝に到つて大に世に興
らん、後に瀉山此語を擧して仰
山に問ふ、黃檗當時祇臨濟一人
に囑するか、更に人あるとある

(三九)洞山
良价禪師の
曇晟禪師の
嗣、唐の咸
通十年、六
十三歳にて
化す

(三七)風穴
和尚とは風
穴延沼禪師
のとなり

か、仰山曰く有り、祇是れ年代
深遠なり、和尚に擧似せんとを
欲せず、瀉山曰く然も是の如く
なりと雖も吾れ亦知らんとを要
す、汝、但擧せよ看ん、仰山曰
く一人あり南を指して吳越に行
かしめん、大風に遇はば即ち止
まんと、風穴和尚を識する也。

三八、臨濟四料簡

臨濟晚參衆に示して曰く有時は
奪人不奪境、有時は奪境不奪人、
有時は人境俱奪、有時は人境俱

不奪。

三九、洞山の無寒暑

洞山の价禪師に僧問ふ、寒暑到
來如何か廻避せん、師云く無寒
暑の處に向つて去らざる、云く
如何が無寒暑の處、師云く寒の
時は閻梨を寒殺し、熱の時は閻
梨を熱殺す。

四〇、洞山三斤

僧因に洞山に問ふ、如何が是れ
佛、山曰く麻三斤。

四一、洞山三頓

(四五)會昌沙汰とは武宗帝が佛教を廢したることを云ふ(四六)仰山は仰山慧寂禪師の號、寂子法嗣、禪師の號、慧寂の號なり

たると、土地神遂に一見するを得て便ち禮拜す。

四五、巖頭渡子

巖頭會昌沙汰に値つて後、鄂州湖の邊に於て渡子と作る、一日因に一婆子一孩兒を抱いて來る、乃ち問ふ槓を呈し棹を舞すは即ち問はず、且く道へ婆子が手中の兒、甚れの處よりか得來る、頭槓を以て便ち打つ、婆曰く婆七子を生ず、六箇知音に遇はず、只這の一箇も也た消得せ

ずと云つて便ち水中に抛向す。

四六、仰山枕子

僧仰山に問ふ、法身還て說法するを解すや也無や、山曰く我説き得ず、別に一人の説き得るあり、僧曰く説き得る底の人什麼の處にかある、山枕子を推出す、溪山聞いて即ち曰く、寂子劍刃上の事を用ふ。

四七、俱胝の一指

俱胝禪師初め住庵の時、尼有り笠を頂き錫を携へて至り、禪床

(四七)天龍は大梅法常の嗣なり、其の詳傳を知らず、傳を書にも見え(四八)趙州觀音院從諗禪師の號なり

を繞ると三匝して云く、道ひ得ば即住せん、師無語、自嘆じて云く我是丈夫たりと雖も却て丈夫の作なし、庵を棄て、徧く參せんと欲す、是夜土地神報じて云く、庵主雲遊することを須ひされ、自ら智識ありて爲に法を説かん、次の日果して天龍和尚庵に至る師前話を擧して之を問ふ、龍一指を豎つ、師忽然として大悟す、復他に遊ばず、後凡問ふ所あれば唯一指を豎

つ、臨終に衆に謂つて云く、我天龍一指頭の禪を得て一生受用不盡なりと云うて乃ち一指を豎て、逝く。

四八、趙州の柏樹子

趙州の諗禪師に僧問ふ、如何が是れ祖師西來意、師云く庭前の柏樹子、云く和尚境を將て人に示すと勿れ、師云く我境を以て人に示さず、云く如何が是れ祖師西來の意、師云く庭前の柏樹子。

(四九)嚴陽
尊者は趙州
禪師の嗣な
り、洪州新
興に居れり

四九、趙州放下着
嚴陽尊者、趙州に問ふ、一物不
將來の時如何、州曰く放下著、
者云く已に是れ一物不將來、這
の什麼をか放下せん、州曰く恁
麼ならば即ち擔取し去れ、者言
下に於て大悟す。

五〇、趙州石橋
趙州一日首座と同じく石橋を看
て乃ち首座に問ふ、是れ甚麼人
か造る、座曰く李膺、師云く造
る時甚麼の處に向つてか手を下

す、座無對、師曰く尋常石橋を
説く、問著すれば手を下す處も
也知らず。

五一、趙州諸聖地獄
崔郎中、趙州に問ふ、從上の諸
聖還つて地獄に墜すや也無や、
州曰く幕上に落つ、中曰く已に
是大善知識、甚と爲てか還つて
地獄に落つ、州曰く我若墮せず
んば、争てか郎中を救ひ得ん。

五二、趙州狗子佛性
趙州因に僧あり問ふ、狗子に還

(五三)南泉
は馬祖の法
嗣なり、深
大り、夫と
依せりと
云ふ、八十
八年七月
八化す

つて佛性有やまた無や、州曰く
無、僧曰く一切衆生皆な佛性あ
り、狗子什麼としてか却て無な
る、州曰く伊に業識性の在るが
爲なり、又僧ありて問ふ、狗子
に還つて佛性ありや也無や、州
曰く有、僧曰く既に有、甚と爲
てか却つて這箇の皮袋裡に撞入
する、州曰く知つて故に犯すが
爲なり。

五三、南泉平常是道
南泉、因に趙州問ふ、如何なる

か是れ道、泉曰く平常心是れ道、
州曰く還つて趣向を假る可きや
否や、泉曰く向はんと擬すれば
即ち乖く、州云く擬せずんば争
てか是れ道なるを知らん、泉
云く道は知にも屬せず不知にも
屬せず、知是妄覺不知は無記、
若し眞に不疑の道に達せば猶大
虚の廓然洞豁たるが如し、豈強
ひて是非せしむ可んや、州言下
に大悟す。

五四、曹山の不變異

(五四)曹山
本寂禪師の
洞山禪師の
法嗣なり
曹洞二師と
云ふは此の
父子を指す

(五五)曹山
霞とは曹山
本寂禪師の
資にて曹山
慧霞と云へ
る人なり

(五六)雲門
文偃禪師を
云ふ

曹山の本寂禪師洞山を辭す、山
云く子甚麼の處に向つてか去
る、師云く不變異の處に去る、
山云く不變異の處豈に去るとあ
らんや、師云く去も亦不變異。

五五、曹山霞の佛未出世
曹山霞禪師に僧問ふ、佛未だ出
世せざる時如何、師云く曹山は
如かず、云く出世の後如何、師
云く曹山には如かず。

五六、雲門の體露金風
雲門の偃禪師に僧問ふ、樹凋み

葉落つる時如何、師云く體露金
風。

五七、雲門東山水上行
雲門に僧問ふ、如何なるか是れ
諸佛出身の處、師云く東山水上
行。

五八、雲門の遊山翫水
雲門の偃禪師に僧問ふ、如何な
るか是れ學人の自己、師云く遊
山翫水。

五九、法眼の佛
法眼の益禪師に、僧慧超問ふ、

(五九)法眼
文益禪師を
云ふ

如何なるか是れ佛、師云く汝は
是れ慧超、其僧是に於て悟入す。

(六〇)天台
德韶は法眼
文益の資永
明延壽は天
台德韶の資
なり

六〇、永明の撲落非他
永明壽禪師天台詔國師の會中に
在つて、普請する次で、墮薪聲
あるを聞いて、豁然として契悟
し乃ち曰く、撲落他物にあらず、
縦横是れ塵にあらず、山河并に
大地全く法王身を露す。

六一、同安の家風
同安の丕禪師に僧問ふ、如何な
るか是和尙の家風、師云く金鷄

子を抱いて宵漢に歸り、玉兔懷
胎して紫微に入る、云く忽ち客
の來るに遇はゞ何を將じか祇對
せん、師云く金果日朝猿摘み去
り、玉花晩後に鳳啼み來る。
六二、同安の依經解義
同安の丕禪師に僧問ふ、經に依
つて義を解するは三世佛の宛、
經の一字を離るれば即魔說に同
じと此理如何、師云く、孤峰迥
に秀て、煙蘿を掛けず、片月空
に横はつて白雲自ら異なり。

(六三)香林
澄遠禪師の資
と雲門の資
なり

六三、香林の室内一燈
香林遠禪師に僧問ふ、如何なる
か、是室内の一盞燈、遠曰く三人
龜を證して鼈と作す。

(六四)巴陵
顛鑿のとな

六四、巴陵の明眼落井
巴陵鑿禪師、僧問ふ如何か、是れ
道、師云く明眼の人井に落つ。

(六五)智門
光祚禪師の
と雲寶重顯
禪師の師と
して世に知
らる

六五、智門の蓮華
智門の祚禪師に僧問ふ蓮華未だ
水を出てざる時如何、師云く蓮
華、云く水を出て後如何、師云
く荷葉。

(六六)梁山
緣觀禪師の
と(六七)汾陽
の善昭禪師
のとなり
山省念の法
頤なり

六六、梁山日用の事
梁山の觀禪師に僧問ふ、如何か
是れ日用の事、師云く、碧玉點
破す瑠璃の色、滿目紅塵砂を見
ず。

(六七)汾陽
の善昭禪師
のとなり
山省念の法
頤なり

六七、汾陽の大道之源
汾州昭禪師に僧問ふ如何なるか
是れ大道之源、師曰く地を堀つ
て青天を覓む、曰く、何ぞ此の
如くするを得ん、師曰く幽玄を
識取せよ。

(六八)揚岐
方會禪師の
となり

六八、揚岐の面壁
揚岐の會禪師に僧問ふ、少林面
壁の意志如何、師云く西天の人
唐言を會せず。

六九、慈明の一言駟馬
慈明因に僧問ふ如何か、是れ本來
の面目、明云く一言已に出れば
駟馬も追ひ難し。

七〇、慈明の連喝
揚岐慈明に問ふ、幽鳥語喃々雲
を辭して亂峰に入る時如何、明
曰く我荒草裡に行き、汝又深村
に入る、岐曰く官には針をも容

れず、更に一問を借り得てんや、
明便ち喝す、岐曰く好一喝、
明亦た喝す、岐亦た喝す、明連
喝に兩喝す、岐便ち拜禮す、明
曰く這事是箇の人にして正に能
く擔荷す、岐拂袖して出づ。

七一、黃龍の三關

黃龍禪師、隆慶の閑禪師に問う
て曰く、人々箇の生緣の處あり、
如何なるか、是れ汝が生緣の處、
對へて曰く早晨に白粥を喫す、
今に至つて又飢を覺ゆ、又問ふ、

(七二) 晦堂祖
心は晦堂の
慧南禪師の
資なり
(七三) 山谷
谷居士、史山
庭堅字は魯
直と云ふ人
なり
(七四) 死心
資、晦堂の
新、黄龍の
悟なり

我手何ぞ佛手に似たる、對へて
曰く月下に琵琶を弄す、又問ふ、
我が脚何を驢脚に似たる、對へ
て曰く鷺鷥雪に立つて同色に非
ず、師毎に此の三語を以て學者
に問ふ、能く其の旨に契ふもの
無し、天下の叢林目づけて三關
と爲す、纔に酬者あれば師可吝
となく目を斂めて危坐す、人其
意を涯むるとなし、之を延ひて
又其の故を問ふ、師云く已に關
を過ぐる者は臂を掉つて徑に去

る、安んを關吏有るとを知らん、
黄に從つて可否を問ふ、此れ未
だ關を透らざるものなり。

七二、晦堂木犀

山谷一日晦堂和尚に參ず、堂曰
く公の暗んずる所の書中に一兩
句あり、仲尼曰く「以吾爲隱
乎二三子」吾無隱乎爾、甚だ
宗門の事と恰好なり、公之を知
る麼、云く知らず、時に晦堂山
谷と山行の次で天香山に満つ、
堂問うて曰く公、木犀花の香を

(七三) 五祖
法演禪師の

(七四) 天童
宏智禪師の
と丹渡子淳
の法嗣なり

聞くや、云く聞く、堂曰く吾爾
に隱すとなし、山谷忽ち悟り去
る、兩月を経て後、庭堅、死心
禪師に參ず、死心一拶して曰く
心長老死し學士死して焼いて兩
堆の灰となす、恁麼の時什麼の
處に向つて相見せん、庭堅擬議
して如何ともするとなし、後、
黔南道中に在つて晝寢ね、覺る
に及んで覺えず忽ち悟りて死心
の用處を得、是れより大自在の
三昧を得。

七三、五祖の牛過窓櫺

五祖の演禪師曰く、譬へば水牯
牛の窓櫺を過るが如し、頭角四
蹄都べて過ぎ了る、其麼に因て
か尾巴過るとを得ざる。

七四、宏智の不借

宏智禪師云く功を借りて位を明
す、位を借りて功を明す、借々
不借、全超不借借。

七五、大涅槃底

古徳云く、斷煩惱を二乗と名け
煩惱不生を大涅槃と名く。

(七六)龍門
 清眼禪師は
 南嶽下十師
 世に於て、
 祖法演禪師
 の法嗣なり
 (七七)松源
 岳とは松源
 崇嶽禪師の
 十八世に當
 る、
 (七七)密庵
 の傑とは密
 庵咸傑禪師
 のとたり
 (七八)中峯
 本とは中峯
 峯明本禪師
 のと、高峯
 原妙禪師の
 法嗣なり、
 南嶽下二十
 二世に當る

七六、牧庵法輪常轉
 牧庵忠禪師、初め台教を習ふ、
 後禪宗に志す、龍門の眼に謁す、
 造次の頃、提撕を忘れず、適々
 水磨に縦歩して額を見るに、云
 く、法輪常轉と忽ち大悟す。

七七、松源不是心
 松源岳禪師、初め居士を以て應
 菴の華に參ず、契はず、愈々自
 ら奮勵して密菴の傑に見え、隨
 問隨答す、密嘆じて曰く、黃楊
 木の禪耳、奮勵彌々切にして、寢

食を忘るゝに至る、密の入室に
 會つて、僧に問ふ、不是心、不是
 佛、不是物と、師、傍従り大悟す。

七八、中峯流水
 中峯本禪師、高峯の死關に侍す、
 晝夜精勤、困する時は則ち頭を
 以て柱に觸る、一日金剛經を誦
 す、荷擔如來の處に至つて、恍
 然として開解す、自ら謂へらく
 所證未だ極らずと、彌々益々勤
 苦して咨決怠ると無し、流水を
 觀るに及んで乃ち大悟す。

第六編 日常課誦及行式

第一、法式用語例

來法師家は古
 見れたる定め
 の故に各清
 規は勿論、
 各寺院に於
 て、其趣に
 大にも異なる
 今にも異なり
 今編者が述
 ぶる所は、
 可成る實に
 行はるるに
 其の由を記
 一、其理由等
 本書の暇に
 本書の暇に

【緒言】以下數編に涉りて指南
 する法要及び行式は、叢林に於
 て常に行ふべきものなり、今や
 叢林の規矩漸く忘れられんとす
 る傾向あれば、之を記するに、
 可成る要を摘みて記載し、聊か復
 古の實に資せんとを期す、され
 ど、其用語中、編者が知らず識
 らず、一定の成語を使用すると

あり、仍て先づ、編中の用語の
 一斑を解説して入門の人の爲に
 す、法式指南の處にて不明なる
 所あらば、一たび此の用語例に
 就きて精査さるべき也、

其一、身體の作法
【合掌】十指の雙掌を合せ、腕
 を胸襟に近づけず、臂を腋下に

は合掌して挿指て
と西の間に挿指
みでたるとり
あり其體裁
異彩を放ち
たるも似つ
する小技に失
寧ろ観るに
宜しとすを
又東序より
出づるとり
釋當なるとり
今當斯くれば
めは斯くれば
定ばも

て左の方より、頭首位の後を過
ぎて、知事位の前を維那位に往
き、少しく維那位より先の方へ
進みたる所にて立留り、右へ身
を轉じて、直に南面し（此間に
維那は回向雙紙を取るべし）住
持の後方に立ちて、回向終るを
待つ、回向終る時、又維那位に
進みて前と同様に身を轉じ頭首
位の後を過ぎて東序の内陣に歸
るべし大抵の誦經には回向雙紙
のとあり、今は一々詳説せず、

回向双紙は、三寶に戴せて捧げ
行くを常法とす、
導師の焼香に進む時の磬子鳴る
時、内陣を出て、焼香終つて、問
訊の時の磬子と同時に維那に回
向雙紙を渡し、歸る時には回向
の終る際に維那位の前に進み、
回向終りたる時の磬子にて受取
り「諸尊菩薩」の磬子にて内陣
に入れば、儀式甚だ整ふ、之は
口傳なり、
【住持焼香法】進んで焼香と云

*五侍者は
法式には必
ず備はるも
のに侍者近
來の侍者侍
香と云ふ侍
甚しきと云
なれど、誤り
徳は誠めお

ふ時は、拜席の左（向つて）よ
り進み、焼香終つて右より歸る
を常例とす、但し展坐具なき時
は正面より進む師家もあり、普
通の人は左に進み、右に歸るを
穩當とす、
【授三歸戒】普通に三歸戒と云
ふは、(一)懺悔文(二)三歸戒
(三)三聚淨戒(四)十重禁戒の四
通り授くるを云ふ、授三歸戒と
云ふは、略して云ひたる也、其
詳細は「剃度式」の授け方にあ

り、一々は説かず、就いて見よ、
【侍者】小院にては侍者侍香の
名あり、今、本書の指南には此
名なし、若し五侍者なき時は、
本編に云ふ請客侍者を侍者と見
做して行ふべし、
【侍香】之も亦本編にはなし、
普通の場合には、焼香侍者を侍
香と見做して行ふべし、但し、
侍香は近來侍者たる程の舊叢林
には配役されぬ風あり、若し、
法式に慣れざる者侍香ならば、

に拘泥して
議論をなして
たれども、
日中諷經と
云ふと必ず
しも不可な
らしむ

▲罷とは、
濟んでから
と云ふほど
の意味なり

時を指すには限らず、午時の前
に經を讀む謂なり、又午時とも
云ふ、之も同様のとなり、
【齋罷】とは、今日普通云ふ、
午后のにて三時頃までを云
ふ、

【晡時】齋罷の次の總稱にて、
念誦、宿忌等をなす時間は即ち
晡時なり、

【初夜】黄昏の時より後を初夜
と云ふ、初夜坐禪等の名あり、
【昏鐘後】日没後二時半を過ぎ

て、昏鐘を打つとなれば、其後
は、殆んど、初夜に等し、され
ど夜參行茶などあれば、必要に
應じて、其時間を確定する爲め、
此文字を用ふるとあり、

【開枕】一衆打眠の時を云ふ、
大抵午后九時頃を云ふ、されば
時々、開枕前とか、開枕後とか
云ふとあり、

【罷の文字】叢林にてよく用ふ
る文字は「罷」の一字なり、時刻
は定め難きも、朝課罷、粥罷、

其他何々罷と云ふと多し、之は
何々の後と云ふとなり、一たび

第二、日常課誦法

其一、朝課諷經

【準備】殿行は殿鐘の打出しを
なし、本尊前、伽藍神、土地前、
祖堂、祠堂等に香燭を準備し準
備整ひたる時、戒尺二聲、鐘司
殿鐘第一會を轉疊ること
(第一會にて各寮衆上殿)

了解せば、さしたる困難はなか
るべきなり。

鐘司は僧堂にて堂行の手磬二聲
するを聞いて第二會を轉疊ると
(第二會にて僧堂衆上殿)
鐘司第三會を擧ぐれば住持上殿
住持上殿の時に七下鐘のと
大衆、侍者、行者等の上殿の
法は佛殿西序の柱より左足を
先にして入るべく出る時には

×殿上の
殿持上
の住持
上方の
大衆の
此朝課
の法に
此に於
しは具
注は具
と意を
注を佛
*と佛
通作法
り作と
心は此
べし爾
心後得
ん説示
ん説示

衣の袖を許入
法を修する規
東に如來南無
三唱光如來
廢せし如來
向は祝の佛の
界の貴き佛の
を併せの願に
たを佛の願に
興隆の願に
の來意を佛の
△古來の願に
悲の來意を佛の
限祝の來意を佛の

圓を抜き、神大
咒とあり、其
爾とあり、其
要なく、其
大支とあり、其
差支とあり、其
に心守り、其
を諸災に、其
と諸災に、其
つは諸災に、其
と諸災に、其
加護の功に、其
大護の功に、其
愈者の功に、其
守神の功に、其
守神の功に、其
守神の功に、其

某神當山土地護御藍神一切護
法の諸天善神、威光を増加せ
る無量の徳海に回向す、祈る
所は、皇風永く扇ぎ佛日輝き
を増し山門鎮靜、修道無難、
國家安康、萬民豊富ならんと
を、
終つて住持は身を廻し、佛前に
向ひて普同三拜、散堂のと、

其七、本尊上供

本尊上供は毎月一日と十五日の

徳は、眞如實際に回向し、無
上佛果菩提を莊嚴す、四恩總
て報じ三有齊く資け法界の有
情と同一種智を圓にせんとを
拜なし、臨時の上供ならば三拜
散堂、堂行手磨を二聲す、兩班
相引て課誦位に就き、大衆著坐
日中諷經常の如し、

其八、達磨献湯諷經

四日晡時殿鐘上殿兩序分班對
立住持入堂、佛前に上香し、直

午時に行ふものとす、其他の場
合にても、行ふとあり、凡て此
の式に依るべし
知殿、豫め香華燈燭茶菓湯佛餉
を準備す、齋鐘の後、殿鐘大衆
上殿、兩序分班對立す、住持入
堂、進みて上香普同三拜、具を
收め復た進みて香を燒き献茶湯
畢つて揖する時、堂行打磬維那
心經を擧す、大衆同誦す、回向
に云く
上來、般若心經を諷誦する功

に身を轉じて達祖前に進み上
香、退いて普同三拜、進んで上
湯、揖する時堂行打磬、住持は
退いて三拜し具を收めて立つ、
維那大悲呪を擧す、大衆同誦、
回向に云く
淨法界の身、本出沒無し、大
悲の願力、去來を示現す、仰
ぎ冀くは眞慈、俯して照鑑
を垂れ玉へ、山門斯の辰に遇
ふ毎に、虔んで香花燈燭蜜湯
を備へ、謹て比丘衆を集め、

